

文學博士黒川真頼大人存

帝國大學東京大久保初雄先生著

古事記傳彙

卷下

大坂

國書出版株式會社發行

古事記講義下卷

大久保初雄著

大雀命坐難波之高津宮治天下也此天皇娶葛城
 之曾都毘古之女石之日賣命后大生御子大江之伊
 邪本和氣命次墨江之中津王次蝮之水齒別命次
 男淺津間若子宿禰命柱四又娶上云日向之諸縣君
 半諸之女髮長比賣生御子波多毘能大郎子亦名
 大日下王次波多毘能若郎女亦名長日比賣命亦
 名若日下部命柱二又娶庶妹八田若郎女又娶庶妹
 宇遲能若郎女柱二此之二柱無御子也凡此大雀天皇

御子等并六王男王五柱 女王一柱故伊邪本和氣命者治天下
 次瓊之水齒別命亦治天下次男淺津間若子宿禰
 命亦治天下也此天皇之御世爲大后石之日賣命
 之御名代定葛城部亦爲太子伊邪本和氣命之御
 名代定壬生部亦爲水齒別命之御名代定瓊部亦
 爲大日下王之御名代定大日下部爲若日下部王
 之御名代定若日下部又役秦人作茨田堤及茨田
 三宅又作丸邇池依網池又掘難波之堀江而通海
 又掘小椅江又定墨江之津

○大雀命 此命の名義之既に述べたり仁德天皇と申す帝は此命に

ぞある○難波之高津宮 難波之攝津國の地名なり高津は今の大阪
 の城地あり今高津とある所とは異なり○葛城之曾都毘古 葛城之
 大和國の地名なり曾都毘古の曾はいさの約なり功あるをめていふ
 都は天爾波ののと同じ毘古之男子の稱詞なり此人は建内宿禰の御
 子なり○石之比賣 石といはの轉音なり勢あるをいふ五百の意に
 あらず之はぬと同じく親愛の語あり故にいほぬといふ意比賣は女
 子の稱詞あり○大后 おほきさきと之非常に尊みたるなり前に之
 此例なしされども神功皇后をおほきさきさきといはれしは仲哀天皇の崩
 れ給へる後應神天皇の申されたるなりまだ現在にやしますにいは
 れしはこれが初めなり○大江之伊邪本和氣命 大江は山城國乙訓
 郡にある地名なり伊邪之進むの意にていさならふの語なり本はお波
 の意和氣は武の意いさおほわけの命の義○墨江之中津王 墨江は

攝津國の墨江なり中は仲の意津はのの意○嶮之水齒別命 嶮之河
内國多治比郡にある地名なり水之端にてみつゝしきをいふ齒は
動物に生ずるものなり故にみいつはの命といふ意○男淺津間若子
宿禰命 男淺津の男と發語あり淺津は大和國葛城郡にある地名な
り若子はわか子にて小なり宿禰のすくは清の意ねは親愛の語なり
○日向之諸縣若牛諸 日向のことは中卷にいへり諸は下の諸とお
なじ意縣君は縣主の意牛は大人の意諸はまいろの意なり○髮長比
賣 髮の長きをもて名となりたるなり○波多毘能大郎子 波多毘
とふとびかり甚しくしびの意應神天皇の條にはたびとあるに同じ
郎子はいろつこなり男子を美めたるあり○大日下王 大と殊に稱
へたる語なり日下河内國河内郡にある地名なり○波多毘能郎女
ふとびのいらつめなり女子を美めたるあり○長日比賣 長は稱名

日はくしびの意故に長くしびひめなり○若日下部命 若は小なり
兄の大に對したるなり日下と兄君に同じ部は群をいふ○庶妹 ま
まいもと間やいもとにて同母妹にあらず異母妹をいふ腹ちがひの
妹をいふなり○八田若郎女 この郎女は應神天皇の御女なり○宇
遲能若郎女 此郎女は宇遲能若郎子の妹なり○御名代 みなし
ろとは御名のしろなりしろはなはしろやましろのしろと同じくそ
のしろしにとめる者なり故にしろは專有する意即ちあめのしたし
ろしめすといふも天下を專有することなりまたいふそれだけをし
めをさむることなりそれと同じく名代と名のしろととして持ちて
いるなり○葛城部 葛城は大和國の葛城なりその所に置く百姓を
部といひて群をなさしむるをいふ故に葛城部といふこれ後世に残
さん爲ちればなりまたいふ大后の爲に葛城の群を定めたるにて大

六
后の生れたる里の名を百姓につけたるなり而して御名代の民を立
ゝるは國國にありて一代石之比賣の百姓なりされど永代葛城部と
ありて人にゆづりもし又官に奉りたることあるありかくて部は止
まらず傳はりたり○壬生部 みぶべとみむべなりふとむと通音な
ればなりさむしをさぶしと云ふが如し○すべて御名代は當人の名
で定るものなりさるに大湯惠若湯惠なるものあるより壬生部を定
めたるなり但し壬生部は生れおちたるときより乳をわがるまでの
間の職掌なりそれを定めたるなり○瓊部 齒別命の自分の生れた
る地の百姓を定めたるなり○大日下部若日下部 いづれも自分の
生れたる地の百姓を定めたるなり○秦人 此人は秦始皇の秦なり
これ弓月君の連れ來たりたるなりさて秦をはたといふとはたをる
ことが職なるゆゑにそのわざより秦の字をとたとよみしなり○三

吉備海部直之女名黒日賣其容姿端正喚上而使
也然畏其大后之嫉逃下本國天皇坐高臺望瞻其
黒日賣之船出浮海以歌曰游岐幣邇波表夫泥都
羅羅玖久漏邪岐能摩佐豆古和藝毛玖邇幣玖陀
良須故大后聞是之御歌大忿遣人於大浦追下而
自步追去於是天皇戀其黒日賣欺大后曰欲見淡
道島而幸行之時坐淡道島遙望歌曰淤志豆流夜
那爾波能佐岐用伊傳多知豆和賀久邇美禮婆阿
波志摩淤能碁呂志摩阿遲摩佐能志麻母美由佐
氣都志摩美由乃自其島傳而幸行吉備國爾黒日

宅 みやけ七御家なりこれ穀物を入る、倉をいふ○難波之堀江
此堀江は當時ほりたるなり江は物のやはらかなるゆと同じ元は水
勢の閑あるを云ふ○小椅 せばしは今のをばせをいふ○墨江之津
津は所なり舟の泊する所をいふ

於是天皇登高山見四方之國詔之於國中烟不發
國皆貧窮故自今至三年悉除人民之課役是以大
殿破壞悉雖雨漏都勿脩理以憾受其漏雨遷避于
不漏處後見國中於國滿烟故為人民富今科課役
是以百姓之榮不苦役使故稱其御世謂聖帝世也
其大后石之日賣命甚多嫉妬故天皇所使之妾者
不得臨宮中言立者足母阿賀迦迦嫉妬天皇聞看

賣令大坐其國之山方地而獻大御飯於是為煮大
御羹採其地之菘菜時天皇到坐其孃子之採菘處
歌曰夜麻賀多邇麻那流阿袁那母岐備比登登等
母邇斯都米婆多怒斯久母阿流迦天皇上幸之時
黑日賣獻御歌曰夜麻登幣邇爾斯布岐阿宜豆玖
毛婆那禮曾岐袁理登母和禮和須禮米夜又歌曰
夜麻登幣邇由玖波多賀都麻許母理豆能志多用
波閉都都由久波多賀都麻
○見四方之國 よもはいやおもの約ありみしたまふはみたまふの
敬詞にして延音なり○國中 くぬちとくにうちの約なり○貧窮

まづしのまは火なりつしは遠なり故に火の遠きをもていやし
きことゝあるなり○三年 みとせのとせはとりよせの約なりみた
び田をよせるまでの意○課役 みつきとみいつきなり天皇にみ
いつきたてまつるものるをいふえだちのえと手なり立なり手をも
てするをいふなり○都 かつては我國古語はすべてといふなりさ
てかつはかたの意かたつへのかたとおなじ勿脩理とは修理せざる
をいふ例へば十の物なれば半分もつころはずといふことにてすこ
しも修めざるをいふなり○憾 ひはへの轉音なりものへゆくのへ
なりさてひと物を通行するみちをひといいたるなりそこを水門を
ひと云ふも通行する所なればあり○今科課役 今はもうよいと御
思召されて課役をたはせられしなり○百姓之榮 さかえとさきは
へのつづまりたるなりさきは幸なりはへは延なりひろがる意即ち

百姓の幸にひろがる義なり○聖帝世 ひじりのひとくしひありし
りりは物知の知なり故にくしびしりの世であるといふ義○嫉妬 う
とありとは古人妻の多き内に夫の重く用ゐる人をこなみといひつ
ぎをうはなりといふをうはねといふはうとぬいろをうはねりとい
ふよりおこりたるなりねたみのねはなへなりたみはいたみなりそ
のきへと物のしなへのなへとかき故にしなへいたむの義○不得
臨 のぞくのぞはぬすむのぬと同じく靜にすることくと目をつ
くことなりされば靜に注目するをぞくとといふなりのぞむといふ
とと異なり○言立 ことだてはことばのおこつてたつなり○阿賀
迦 阿賀迦はわがくなりこれあしかくといふことにて俗にあしづ
りといはんが如し足もあしづりをしてねたむといふ意さてあかく
は獸類にいふ語なりしかるをここにいふはかしこくもたとへてい

ひたるなり馬に多くあがきといへり○吉備海部直 師のいはるゝ
 にて海部直の下に名あるべきなりされば逸したるならんかと○黒
 比賣 くのくといくきろはいろなり即ち殿色の義にて美女の
 名なりされば甚しく色あるひめといふ意色心の親愛にしてかはい
 らしい女なりといふが名となりたるなり○喚上 めさげはめしあ
 げの約音なり○使 つかへとつかへることなりこは任用する
 人の方より云ふなり○坐高臺 たかどのと高き殿なり此ときより
 始めて二三階の起りたるなりこれ日本人の考へに出でたるかこれ
 ば外國人の來朝ありてより出來たるなりさて此高臺は離宮なるべ
 し○望瞻 みさけのさけとさからせの約ありふりさけのさけの如く首
 をさけるなりされば首をさけてみることをなり○淤岐幣邊波 おき
 へにそのおきは沖ありへは方ありおきの方にこの意○袁夫禰都羅

々久 袁夫禰は小舟なり都羅羅久とつらくつらくにてつらなりこ
 らなりするをいふ故に小舟のつらなりつらなりするといふ意○久
 漏那岐能 久漏はいくいろなりさきのさときよき事にてさやのさ
 やなりさときよしなりとよすきのさと同じ故にいくいろきよしの
 意○摩佐豆古和藝毛 まさは正の意つこといつこなりうるはしき土
 也これくろひめをなかくいひなしたるあり和藝毛とわがいの
 約音あり○玖爾幣玖陀良須 くはへくだらすはくだりたまふなり
 これ吾愛する人なれば親愛の深きよりしてくだりたまふといひし
 なり○大忿 いたくは大の意にて甚だの意いかりといきのこるな
 り即ちいきこるにて聲を發することなり○大浦 うらは海のうち
 べなり衣の裏と同じ大といふは都によるべきうらなればなり大坂
 大浦大原大津きとて京に入るべき處なればいふこれ美稱なり○自

歩 かしどは元とくかぢを約めたる言なりさるが變志て歩行となれりこは船より行くところを歩にて行くなり○欺 わざむくとは物をそらむくなり虚にて向くことそれよりだますこといなれり表ては従ふやうにみせて裏としたがはぬなり○遙 はろくぐにとこるばるにとの事にてろるとは轉音なり即ちはるばると吉備の口をみさけ給ふなり○淤志豆流夜 かしてゐるやは難波の枕詞なりそのおしと物のたちかさなることをいふ故に縦にわれ横にわれ物の襲ひかさなるをいふなりてゐるは立てゐるの意やは感動詞の感歎のことはなり故に襲ひ立てゐるやわといふ義此處は波につきていへる語なり○那爾波能佐岐用 那爾波はなみはやの約音なり佐岐は前に出でたるはなをいふ用はよりなりゆとおまじよとゆと三五の轉音なり故に難波の崎よりといふ意○伊傳多知互 いでたちて

とこ出立ての義○和賀久邇美禮婆 わがくにみればとわれが國を見ればの義我領國をいふにはわらず○阿波志志摩淤能基呂志摩阿邇摩佐能志麻母美由 阿波の島なりおのころしまの名義は既にいへりわぢまさとは檳榔島をいふまた棕欄をわぢまさといふこれ島にしろの多くあるをもて名づく此三島も見ゆるといはれたり○佐氣都志摩 さけつはさかえつなり樹木の繁茂したるよりいふさかえつしまのうつりてさけつしまといひたるなり○山方 やまかたを本居翁はわがたといはれしといかが師とやまはたなりといこれさわがたと田畠にわれやまといふべきにわらずやまかたはやまをかいはつなしたるところをいふさてわがたをいはんにわがたのわかはあかるくなるにてひらくるなりこれをあきともいふ即ちあきたといふわりあきもあかるくなる地をいふされ元は樹木などのあ

りてうつ／＼としたるをわかるくしたる地をわがたともあきたともいふなりそこで天皇のみわがたは田面になりたる地を云ひて百姓に作りまさす所をいふ田舎のわがたといふもおなじきなり故にやまがたはやまわがたにて畠をいふなり○御飯 御は美稱けは食なり食物をいふ○大御羹 おほみは美稱あつものは古へ物を爲るにはにたきなしたものとみえて物を煮てあつきを奉るものを賞翫するよりわつものといふ名稱あるなり○菘菜 あをなと今いふ菜のことなり○夜麻賀多邇 やまがたとはやまわがたにて畠のことなり畠にの意○麻那流阿袁那母 まけるあをなはまさたるあをかな故に蒔きたる菘菜もの意○吉備比登登 吉備比登登とは吉備人にて黒日賣を指すなり○等母邇斯都米波 ともにしつめばは共にそれつめばの意○多奴斯久母流迦 たぬしくもあるかとは

たのしくまあるかなの意ぬどとは轉音なり母迦共に感動詞にて感歎の辭なりたぬしのたを甚なりぬは親愛の語なり故に甚親愛の深さをたぬしといふなり○夜麻登幣邇 やまとへにとは大和の方にといふ意天皇をさして申したるなり○爾斯布岐阿宜豆 にしふきと風のふきたるかたの西なり即ち西風をいふしは進むの意にて風の古言なりわけてそあらけての約音なりされば西風のあらげての意○玖毛婆那禮 くもばなれと雲かはなれてといふ意にて后の嫉の甚しきをもて離れたりといふ義○曾岐袁理登母 曾岐はしそきか約音なりそのしと末なりそくはすぐるなりされば末にすぐるにて退くの義袁理登母はをりたとても意くへりていへば退き居つたとても意○和禮和須禮米夜 われわすれめやとはわれ忘たやうや忘れとせぬといふ意味やと云ふは古語の定まりなりめとこ

そのめにあらずむの變音なり疑段即ち返動のときとむといはずめ
 といふは古人のつかひざまなり○夜麻登幣邇由玖波多賀都麻 大
 和に行くは誰が夫といふ意つまは男女共にいふことばなりここを
 仁徳天皇を申し奉るなり○許母理豆能 こもりみづのといふにて
 隠り水の如くといふ意○志多用波閉都都 したよりはひつつなり
 はひととほるをへてゆく義これこもり水は地派の水なり樋の筒を
 ほりて埋めたる如くその水の下をへてゆくの上にあらはれぬをい
 ふにて下をくぐつて表むきにあらずをいふ即ち隠れたる水の如く
 下をくぐりながら行くといふ義○由久波多賀都麻 くぐりて行く

は誰か都麻夫ならんといふ義

自_レ此_レ後_レ時_チ。大_レ后_ヲ。爲_レ將_ヲ豐_ヲ樂_ヲ。而_ニ於_ニ探_ヲ御_ヲ綱_ヲ柏_ヲ幸_ヲ行_ヲ木_ヲ國_ヲ。
 之_レ間_ニ夫_ノ皇_ノ婚_ヲ八_ノ田_ノ若_ノ郎_ノ女_ヲ。於_ニ是_ニ大_ノ后_ノ御_ヲ綱_ヲ柏_ヲ積_ヲ盈_ヲ御_ヲ。

船_ニ還_ル幸_ニ之_ノ時_ニ所_ニ駈_ル使_ハ於_ニ水_ヲ取_ル司_ニ吉_ノ備_ノ國_ノ兒_ノ嶋_ノ之_ノ仕_ヲ丁_ヲ。
 是_レ退_ル已_ニ國_ニ於_ニ難_ニ波_ノ之_ノ大_ノ渡_ノ。遇_ル所_ニ後_ニ倉_ノ人_ノ女_ノ之_ノ船_ノ。乃_チ語_ル。
 云_ハ天_ノ皇_ノ者_ヲ皆_ニ婚_ヲ八_ノ田_ノ若_ノ郎_ノ女_ヲ。而_{シテ}晝_ニ夜_ニ戲_ル遊_ル。若_シ大_ノ后_ノ不_レ
 聞_ク看_ル此_ノ事_ヲ乎_カ。靜_{カニ}遊_ビ幸_ヲ行_フ爾_レ其_ノ倉_ノ人_ノ女_ヲ。聞_ク此_ノ語_ヲ言_ハ即_チ追_ヒ
 近_ク御_ヲ船_ノ白_ク之_ノ狀_ヲ具_シ如_シ使_ハ丁_ノ之_ノ言_ヲ。於_ニ是_ニ大_ノ后_ノ大_ノ恨_ヲ怒_ヲ。載_ル
 其_ノ御_ヲ船_ノ之_ノ御_ヲ綱_ヲ柏_ヲ者_ヲ悉_ク投_テ棄_ル於_ニ海_ニ。故_ニ號_ス其_ノ地_ヲ謂_フ御_ヲ津_ヲ。
 前_ニ也_ニ。即_チ不_レ入_ル坐_ス宮_ニ。而_{シテ}引_キ避_ク其_ノ御_ヲ船_ノ。泝_リ於_ニ堀_ニ江_ニ。隨_フ河_ニ而_シ。
 上_ニ幸_ス山_ノ代_ニ。此_ノ時_ニ歌_ハ曰_ク都_ノ藝_ヲ泥_ヲ布_フ夜_ニ。麻_ノ志_ヲ呂_ノ賀_ノ波_ノ袁_ノ。
 迦_ハ波_ノ能_レ煩_ル理_ヲ和_シ賀_ノ能_レ煩_ル禮_ヲ婆_ヲ迦_ハ波_ノ能_レ倍_ス邇_ニ。於_ニ斐_ニ陀_ニ。
 流_ル。佐_ノ斯_ノ夫_ノ袁_ノ。佐_ノ斯_ノ夫_ノ能_レ紀_ス斯_ノ賀_ノ斯_ノ多_ノ邇_ニ。於_ニ斐_ニ陀_ニ。弓_ヲ流_ル。

波^ハ毘^ヒ呂^ロ由^ユ都^ツ麻^マ都^ツ婆^バ岐^キ斯^シ賀^ガ波^ハ那^ナ能^ネ豆^ヂ理^リ伊^イ麻^マ斯^シ芝^シ
 賀^ガ波^ハ能^ネ比^ヒ呂^ロ理^リ伊^イ麻^マ須^ス波^ハ淤^ウ富^ホ岐^キ美^ミ呂^ロ迦^カ母^モ即^チ自^ジ山^{サン}
 代^{ダイ}迴^テ到^リ坐^ソ那^ナ良^ラ山^{サン}口^コ歌^カ日^ジ都^ツ藝^ギ泥^デ布^フ夜^ヤ麻^マ斯^シ呂^ロ賀^ガ
 波^ハ袁^{エン}美^ミ夜^ヤ能^ネ煩^{バン}理^リ和^ワ賀^ガ能^ネ煩^{バン}禮^レ婆^バ阿^ア袁^{エン}邇^ニ余^ヨ志^シ那^ナ良^ラ
 袁^{エン}須^ス疑^ギ袁^{エン}陀^ダ豆^ヂ夜^ヤ麻^マ登^ト袁^{エン}須^ス疑^ギ和^ワ賀^ガ美^ミ賀^ガ本^{ホン}斯^シ久^ク邇^ニ
 波^ハ迦^カ豆^ヂ良^ラ紀^キ多^ダ迦^カ美^ミ夜^ヤ和^ワ藝^ギ幣^ヘ能^ネ阿^ア多^ダ理^リ如^カ比^ク歌^カ而^ニ
 還^{エン}暫^シ入^ニ坐^ソ筒^ツ木^キ韓^{カン}人^ニ名^ナ奴^ヌ理^リ能^ネ美^ミ之^ノ家^カ也^ニ。

○大后 后は石之比賣をさしたるなり○豊樂 とよは美稱あかり
 は顔のあかるくなる事にて酒宴の事をいふ○御綱柏 みの三
 なりつなは角の轉音なりかしははけしきはにて食物の下に敷く葉
 ありこれあつくうるとしきをもて名づくどぞ古人豊樂神供等に御

酒を盛る柏の葉にて大きくして其尖三岐をなせるものといふ故に三
 角柏と書すまた大神宮に用ゐるは志摩の土貢の島より奉る葉の形
 穀に似たりといふさて此三角柏の難波になきをもて紀國にいでま
 せるなり○積盈 みてそみたせての約なりここはつみみたせてと
 いふ意○水取司 もは眞赤りひははることなり器の上に開くこと
 を云ふ故に茶碗をもひと云ふされバ水之器に入れて飲むもの故に
 水をいふこといふなりみもひといふと飯むもの故に美稱の辭を
 加へたるなりこれによりて單に水をさしてもひとはいふべからず
 汲取りたる所をもひといふこれ飲料にせんとてなりなと食物の料
 にあてたるときえなどなる如く太根にても食料になるときはなど
 いふが如しこれともひは同志さきり天皇の食料となるべきものも
 えもひといふなりそのもひを取ることとを掌る役所を水取司といふ

なり○所駆使　つかはゆるはつかはるる也○吉備兒島之仕丁　吉備と今之備前備中備後をいふなり兒島は備前にありここは備前の兒島の仕丁といひたるあり仕丁之役にあたりて出るものをいふさてそのよはろとは足のひきかがみをいふ語にて膝の折のくぼやかなるどころを云ふ即ちひざぶしのうしろを云ふ故によは節なり竹の節の如し足の節も同玄はろは鳥のはろと同じくはらとなりたるどころをいふされば鳥のとがひの下をはらばといふそのとくばみたるときに生へたる毛故にはろはと云ふ雉子のほらうつと云ふも同じ足のしかがみのほらも足を以てつかはる故に云ふなり即ち足をはらにしてつかはるの意にて使に物を彼此とするものなり○己國　己國とは吉備の國をいふ○大渡　すべて都に接近したるどころは大をつけるなり大江大津の大の如し渡はわたる所にて海を

いふなり○倉人女　倉人は後世の倉人とは異なりたりこの倉人蔵の出納をするものをいふ後世のはそれより出でて役目の違ふなり後世にていへば典藏尙蔵と同じきか○語云　かたりけらくはとはかたりけることはの意けるの延音けらくなり○戲遊　たはれとはとはふれを約めたるなりとふれとどぼけることにてたはるゝも同じきことあり故にどぼけてましますをの意○不聞看　きこしめさねかもとはきこしめさねばにかあらんまわといふ意かは天爾波の疑辭なりもは感動詞の感歎のもなり○追近　おひしきのしきはすきと同じすきはつきと同じくおもひつきといふもおひすきといふもれひしきといふもみな同じきなり○投棄　なげうてとこなげうつけなり即ちうちすてにておけうちすてといふ意○御津　みつとあるはかたりつたへのあやまりなりと師はいれとれき此處をか

れそこをかしはのわたりとあるべきなり御は美稱津之大津の津と
 かなじ○引避 よぎとよぎりの約にて外に行く義即ち引きたがひ
 に他に行く義○浜於堀江 ほり仮にさかの布りしてといふと淀川
 にさかにのぼりましてといふ意○上幸山代 河のままたて淀川よ
 り木津川に入りしなり○都藝泥布夜 つぎねふとはつきさねふの
 約音なりつきは木を伐りたるあとに木を植ゑる故に苗木をつぎさ
 ねといふなりねは親愛の語なりきをさねといひまたいはねかねとい
 ふもみな同じねなりふは生ふ所なり夜はよと同じ即しつきさね生
 の意にて苗をしたてるところをいふなり○夜麻志呂賀波遠 夜麻
 志呂は膏腴の地でその地を以て木苗をしたてる故に山代といふさ
 てやまといふは木のしげりにしげる所またいやむれる所を云ひて
 木の繁れるを山といふそれより轉じて地の高さを山といふにな

れりこのやましろは木繁なり如何となれば苗のものをうるつける
 を代といへば木を茂らす代となす故にやましろといふなりされば
 夜麻志呂賀波とつづきては木津川をいふなり上のつきねふは夜麻
 志呂の枕詞となれり○迦波能煩理 木津川を登りといふ意○和賀
 能煩禮婆 わしが津川を上ればの意○迦波能倍邇 木津川のはと
 りにの意○淤斐陀豆流 木津川の邊に生ひ立てるの意○佐斯夫袁
 佐斯夫は木名あり後世させはさせの木ともいふまたしやしやぶとも
 いふ袁はよなり感動詞の感歎の詞なりしやしやぶよといふ意○斯
 賀斯多邇 しがしたにとそれが下にの意○淤斐陀豆流 かひたて
 るは生ひ立ちてあるの意○波毘呂由都麻都婆岐 波毘呂之葉の廣
 きたる木なりこれはりひろきの意由都麻都婆岐のゆつゝいほつな
 りまは眞なりつばきは今の椿なりつばはされものの類つびと同じ

上代ときれものに石木の類をもて作りしなりまた木刀に此木にて
 つくる故に名の残れるなり即ちつびの木といとんが如し○斯賀波
 那能 しがはなのとはそれが花のといふ意○豆理伊麻斯 てりい
 ましは照り坐す意にて椿の花の赤さか照るなり○斯賀葉 しがと
 とそれがはの意○比呂理伊麻須波 ひろりはひろきなり豊なる意
 故に豊にますこの意○淤富岐美呂迦母 おほきみは大君にて天皇
 をさし申し奉るなり呂は親愛の語なり迦母は感動詞の感歎の辭に
 てかちと同じくこの處はカモアの意故に大君いるかまわの義○那
 良山口 那良は大和國の奈良郡なり此の奈良山は山城より行けば
 山城の口となり奈良より行けば奈良の口となるありされど此處と
 奈良山口なりとありてと大和の山口といふ意○都藝泥布夜夜麻斯
 呂賀波袁 此名義上にいへり○美夜能煩理 みやのぼりのかは眞な

りやといやなり故まいやのほりの意○和賀能煩禮婆 わがのぼれ
 ばと上にいへり○阿袁邇余志 わをによしとはいやをによしにて
 土地のよろしきをいふこれならの枕詞あり○那良遠須疑 ちらを
 すぎての意○袁陀豆 をたてのをはたわむのをなりたては美なり
 たわみて美しきをいふこれやまとの枕詞なりされば山のたわみて
 うつくしきことをだてといふなり○夜麻登袁須疑 やまとをすぎ
 なりこのやまとは大和の一國のみにあらず日本を云ひしなりとの
 説われどいかが○和賀美賀本斯 わがみがはしとわが見たと欲す
 るといふ意○久邇波 くにはは國はなり○迦豆良紀 かつらぎと
 大和の葛城にて生所の在所なり父とかつらきそつひこといふ人ぞ
 ○多迦美夜 たかみやと地名なり垂仁天皇の宮を作りたるところ
 なれば宮高といふが地名となれりそれが高宮と轉じたるにや○和

藝幣能阿多理 わがいへのあたりなりそれ茲に後の實家あるをも
 て我見たいとおもふ國は葛城の高宮の我家の近邊なりといふ意さ
 て後の我家にいでますべきなれども家に歸れば臣下の家に歸る
 ことにて位の異なれば見たいとおもふが見ずして歸られたるなり
 ○暫入坐筒木韓人 しましはしばしと同じすこしのをいふ筒木
 と山城國綴喜郡の綴喜なり韓人と百濟人をさすなり故にすこしま
 綴喜かある百濟人の家に入りましたるなり○奴理能美 ぬと親愛
 の辭より出でて器物であれ美をそなへたるものをぬといふことこ
 精巧なるものをいふにて絹なり理はをりの約音なり美とおみの約
 音なり故に絹織臣にて織物の臣なりこれ異國より献りたる西素と
 いふ職掌よりいふて能く織る故にぬりのみと名になれるなり○如
 何に韓人の家にいでましたるにやといふに日本人より百濟人の家

の方美麗なればなり

天皇。聞看。大后。自山代。上幸。而使。舍人名。謂鳥山人。
 送御歌。曰。夜麻。斯呂。邇。伊。斯。祁。登。理。夜。麻。伊。斯。祁。伊。
 斯。祁。阿。賀。波。斯。豆。摩。邇。伊。斯。岐。阿。波。牟。迦。母。又。續。遣。
 丸。邇。臣。口。子。而。歌。曰。美。母。呂。能。曾。能。多。迦。紀。那。流。意。
 富。韋。古。賀。波。良。意。富。韋。古。賀。波。良。邇。阿。流。岐。毛。牟。加。
 布。許。許。呂。袁。陀。邇。迦。阿。比。淤。母。波。受。阿。良。牟。又。歌。曰。
 都。藝。泥。布。夜。麻。志。呂。賣。能。許。久。波。母。知。宇。和。斯。淤。富。
 泥。泥。士。漏。能。斯。漏。多。陀。牟。岐。麻。迦。受。祁。婆。許。曾。斯。良。
 受。登。母。伊。波。米。故。是。口。子。臣。白。此。御。歌。之。時。大。雨。爾。

不避其雨。參伏前殿。戶者違出後戶。參伏後殿。戶者違出前戶。爾匍匐進赴。跪于庭中。時水潦至腰。其臣服著紅紐青摺衣。故水潦拂紅紐青皆變紅色。爾口下子臣之妹。口日賣仕奉太后。故是口日賣歌曰。夜麻志呂能都都紀能美夜邇母能麻袁須阿賀勢能岐美波那美多具麻志母爾太后問其所由之時。答曰。僕之兄。口子臣也。於是口子臣亦其妹。口比賣及奴理能美。三人議而令奏天皇云。太后幸行所以者。奴理能美之所養虫。一度爲匍虫。一度爲殼。一度爲飛鳥。有變三色之奇虫。看行此虫而入坐耳。更無異心。

如此奏時。天皇詔然者。吾思奇異故。欲見行。自大宮上。幸行入坐。奴理能美之家時。其奴理能美已所養之三種虫。獻於太后。爾天皇御立其太后所坐殿戶。歌曰。都藝泥布。夜麻斯呂賣能許久波母知。宇知斯意富泥。佐和佐和爾那賀伊幣勢許曾。宇知和多須。夜賀波延那須岐伊理麻韋久禮。此天皇與太后所歌之六歌者。志都歌之返歌也。

○自山代上幸 山城より舟をめぐらして倭にいでませるをいふなり。○舍人 とねりとのねいろの義これ殿に近く召仕ふ人なればいふそれよりうつりて舍人となれり。○鳥山人 とりやまは地名より出でたるなり。美稱にはあらざるやうに見ゆ。○さて鳥山をつかは

すとき下の歌を覚えさせてやりしなりこれ後に直にいふことのできぬ故に歌ならびいふことのでくるなりすべて古へは諫言にても歌にいふと許してありてまのあたりにいへざるときは歌によそへていひたるなり此處もその通りにて歌をもて口上にやりしなり
 ○夜麻志呂邇 山代にの意○伊斯那登理夜麻 伊之發語斯那之つけなり登理夜麻は鳥山なり即ちおひつけとりやまといふ意○伊斯那伊斯那 れひつけおひつけといふ意○阿賀波斯豆摩邇 阿賀之吾なり波斯は愛なり豆摩は妻なり故に吾愛はしき妻にといふ意○伊斯岐阿波牟邇母 おひつきあそんかまあといふ意これ早く行けといふて鳥山に命じたるなり○丸邇臣口子 丸邇は大和國添上郡の地名あり口子は詳ならずまた此人を后の方にやりしなり○歌曰
 うたひたまそくはあやまれりうたはしめたまはくとあるべきな

り此れ天皇の歌を口づからうたはしむるなり○美母呂能 みもろのみは山なり即ち山室のといふ意○曾能多迦紀那流 曾能は其なり多迦紀は高所にてきは所の意即ち山室の高き所にあるといふ意那流之にあるの約言なり○意富韋古賀波良 意富韋とそ大なる猪なりこは親愛の語なりるを美稱して大るとはいひしなり賀は之と同じ波良は腹なりゐのししのはらといふ意○意富韋古賀波良邇 上の語句を重ねたるなりされども腹にあると云ふてうたひつつ肝といはんために上の句を序となしたるあり○岐毛牟加布 きもむかふといふそ人のそらにはきもがあるかわからず猪鹿といふものと食物として肉を食するものなれば肝が要用なれば波良爾阿流岐毛といひたるなり而してもろくのきもが心にむかふて用をなすをきもむかふとはいふなりこれ心のはたらきをなして手にてなし足

にてなすことさてきもはこりまくふといふ意にて藻とれ奇しく
 腹中にこりまどふものをきもといふ心をこころきもといふもおなじ
 き義なり○許々呂袁陀邏迦阿比淤母波受阿良牟 ころでもわひ
 おもはずであらんとといふ意陀邏之天爾波のただにの約音なり迦は
 天爾波の疑辞なりされば心ただにやわひ思へないであらうといふ
 義○都藝泥布 まへにのべたり○夜麻志呂賣能 やましろ女のと
 いふ意○許久波母知 こくはは木鏝なり金鏝に對したる語なり母
 知は持なり木鏝持ちの義○宇知斯淤富泥 宇知之力を入れてする
 をいふものをうつも同じ義にて物に力を入れてすることなりここ
 之力を入れてうちこんだことにてうちこんだ大根といふ意これに
 對してひくといふもなをひくだいこをひくといふにてとることなりと
 するべし○泥土漏能 ねじろのとは白き根にわらずなへなへとし

てすらすらとしてあるをいふねはなへ奇への意にてたかねのねと
 同じしろはすらすらにて直の字にあたれり○斯漏多陀牟岐 斯漏
 は白きなり多陀牟岐の多と手なり手をたたむの意にて手のひぢを
 いふこれ大根をいへば奇へなへとすらくとしてある大根の白き
 とかかれり○麻迦受那婆許曾 まかすけばこそとはまかすあつた
 ならばこそその意那とけりの將然言なり即ち白き腕を手枕にしてね
 むりたことがあるといふ意○斯良受登母伊波米 しらすともいは
 めとはしらないともいはふとの意さればまかあいであつたならば
 しらないもいとふけれども手枕にしてねむりたことがあるゆゑ
 きさきえしらないと云へんわいといふ義○前殿戸 まへつどのと
 のつは天爾波ののどおなじとは入口なり故に前の殿の入口の義○
 參伏 まるふすとはまゐりふすの意○後戸 しりつとはしりの入

口なり即ちうしろの入口をいふ○此處をくくりていへば口子の臣
 の前殿の入口に伏せば後の入口に出で給ひ後殿の入口に伏せば前
 の入口に出で給ひて違ひたるなり○進赴 しじまひてとと師はい
 とれきはひすすみてとよみあらたむべしと○跪 ひきは膝なりま
 つくは左右をつくなり即ちひざをつくの義○水潦 にたづみの
 にとはにわかにはなりたつはもののおこるなりみはみづなり故
 にわかにおこりたる水の義にわかにてた水をいふ青摺衣あをすり
 はあをにすりなり青き土をとりて衣に模様をすりつけたるなりこ
 れをあをすりと云ふさて此衣に紅紐即ちあかく色つけたる紐を肩
 につくるなり一と前一と後に長くたらすなりこれらは衣の飾とい
 ふべし○仕奉太后 太后と石之比賣なりその石之比賣に口日賣の
 仕へたつれるなりこれ兄君の事を後に申す條なり○夜麻志呂能

山城の意○都都紀能美夜邇 つつきは綴喜なり綴喜郡にある宮に
 の意○母能麻袁須 ものまをすは物を申し上ぐる義○阿賀勢能岐
 美波 阿賀は吾也勢は兄なり岐美は君なり吾兄君はの意○那美多
 具麻志母 なみたくましもとは泣くましきことであるの意もは感
 動詞の感歎の辭なり○匍虫 はふむしとは虫と云ふと同じ虫はこ
 ふべきものちればあり○敷 かひこのかひとかこむなりはまくり
 ささへをもかひといふこは子なり虫の子なり故にこひだす子とい
 ふをかひといふなり○飛鳥 とぶとりと本居翁のよみあやまれる
 之師はとぶむしとよまれさかくあるべきなりさてはふむしの繭と
 なり繭より蝶の出でたるなりされどもここをあとなしことを作り
 てそれになぶらかすをかりごとにてかくはいひたるなるべし○奇
 虫 あやしきむしのあやとあやにかしこしと云ふあやに同じく

しびなるあやしきといふこれあわといふ感動詞の感歎より出でたるなり○異心 けしきみこまろのけはくしびのきの變じたるなりくしびなるみこころといふ意○天皇詔然者吾思奇異云云 天皇のさやうなれば吾もあやしとおもふゆゑに見に行かむと仰せられて難波宮より出で給ひて山代川を御舟にて上りまして奴理能美の家に入りましたるときにそのぬりのみがかへる三種の虫を大后の石之比賣にたてまつりき故に天皇の大后のましましたる殿の入口に立ち給ふて歌はるるにこの義○佐和佐和 さわさわとさわさわといふことさわさわとひきわぐなりすべて人の多くあるときはさわぐ故に云ふ此處は大根を敷多とる故にいふこはかけていひたるなり○那賀伊幣勢許曾 那賀は汝なり大后を指すなり伊幣之家なり勢えすれの約音なり許曾は天爾波のこそなりされば汝か家を

作りてそこにゐればこそといふ意これさわさわとたいそうで家すればの義○宇知和多須 とは遠き所をうちわたる義みわたすとは遠くみやることなりすべてわたすと遠きに目をくばることなり○夜賀波延那須 やかはえはいやくとはわなりそれを約めてやかえともいふなりこれ木の切りたるあとにでるをやかはえといふまたさしすぎてでることをいふされば汝家すればこそここにはまいたれそれ故にまたでできたるなりとの義○岐伊理麻草久禮 さいりまゐくれとと來入り参り來りの義さしすぎてでてくる如く(那須は如きの意來入参り來りの意○六歌 六歌とて天皇の御歌五つ大后の御歌一つ合せて六歌となるなり○志都歌之返歌 志都歌は節を長くするものなりその返歌とはやくするものをいふこれ雅樂寮に傳へりたるものであるといふ呂を律になしてうたふなり

天皇戀八田若郎女。賜遣御歌。其歌曰。夜多能比登
母登須宜波。古母多受多知迦阿禮那牟阿多良須
賀波良許登袁許曾須宜波良登伊波米阿多良須
賀志賣爾八田若郎女答歌曰。夜多能比登母登須
宜波比登理袁理登母意富岐彌斯與斯登岐許佐
婆比登理袁理登母故爲八田若郎女之御名代定
八田部也亦天皇以其弟速總引王爲媒而乞庶妹
女鳥王爾女鳥王語速總別王曰。因大后之強不治賜
八田若郎女故思不仕奉吾爲汝命之妻。卽相婚是
以速總別王不復奏爾天皇直幸女鳥王之所坐而。

坐其殿戶之闕上。於是女鳥王坐機而織服。爾天皇
歌曰。賣杼理能和賀意富岐美能於呂須波多他賀
多泥呂迦母女鳥王答歌曰。多迦由久夜波夜夫佐
和氣能美淤須比賀泥。故天皇知其情。還入於宮。此
時其夫速總別王到來之時。其妻女鳥王歌曰。比婆
理波阿米邇迦氣流多迦由玖夜波夜夫佐和氣佐
邪岐登良佐泥。天皇聞此歌卽興軍欲殺爾速總別
王女鳥王共逃退而騰于倉椅山。於是速總別王歌
曰。波斯多豆能久良波斯夜麻袁佐賀志美登伊波
迦伎加泥豆和賀豆登良須母。又歌曰。波斯多豆能。

久良波斯夜麻波佐賀斯祁杼伊毛登能煩禮波佐賀斯玖母阿良受故自其地逃亡到宇陀之蘇邇時御軍追到而殺也

○天皇云云 此條之前文のつづきにてかたりつたへのかくの如くありければここに入るなりこれらは古事記にままある文体なり前文の所に入るべきものとみるべし○其御歌 とは仁徳天皇の御製と見るべきものぞ○夜多野 やたのとは八田若郎女の在所をいふ此郎女之庶妹なりそれが妻となりたりまた相思ふは常なり後に異母兄弟は婚姻すること能はざることとなれりこれ支那風に習ひしものなるべし○比登母登須宜波 比登母登と一本なり須宜は菅なり笠の菅なりこれは諸草中にて清きもの故にすげといひて御名の

うるとしきになとふなり一本菅はといふ意○古母多受 こもたすとは子持たすなり一本立の菅なるが故に天皇にあそすされば子もたすとはいひしなり○多知迦阿禮那牟 多知は菅の立なり迦は天爾波なり阿禮はものの疎なることにて密の反なりされば家野山鳥のあれもみなそゑんなり故にそのままかくをあれといふ即ちたちとあれてそゑんになるさまなり那牟と助動詞のなんにてであらうの意そゑんになるであらうといふ義○阿多良須賀波良 阿多良の阿はわなわたと同じなはたと通ずるありをしむどきにわなわたといふ歎辭を用ふるありそれより轉じてをしむことゝなれり故におおをしすがはらといふ義そのまますげになりて年老ゆるはをしといふ意言の表にて菅をいひて裏には八田若郎女をいひたるなり○許登袁許曾 ことをこそは言にこそその意○須宜波良登伊波米

すげはらといはめは菅原といはふとの意○阿多良須賀志賣 わた
 らすがしめとはをしいうるはしきひめといふ意一首の歌の意は八田
 之一本菅之子は持たず立ちて枯れんとすあわをしい菅の原である
 言語にこそ菅の原といはふあわをしい清き女といふにて八田之若
 郎女を菅にたとへていひたるなり即ち八田若郎女之子を持たず故
 に漸々に疎遠になりてそのままとなれりさぞ年老いたであらうあ
 わをしい郎女であることばにこそ郎女といふこれか後に聞ゆると
 わしき故に言語にこそいひはふあわをしいうるはしき女をいふ義を
 りこれ天皇の八田若郎女を戀ひたる歌なり○比登理袁理登母 比
 登理は一人なり袁理は居るなり登母とともまたといへどもなり
 一人で居るといへどもなり即ち夫をもたでひとりいたととも義
 ○意富岐彌斯 意富岐彌と大君にて天皇を申し奉るなり斯は天爾

波のぞとおきとそれと譯す大君それの義○與斯登岐許佐婆 與斯
 登は宜しとなり岐許佐婆と聞召さばなりよろしいときこしめさば
 の義○比登理袁理登母 一人で居りますととも意さて一首の歌
 をいへば八田若郎女は獨居ともよし御子はなくともよしと思召し
 棄ることはあらじと天皇のきこしめさば獨居ともなは頼もしくこ
 そ思ひ奉れといふ義二句のひとりをりとももの下に言を含めてみる
 べしまたいふ一人居といふは天皇の御歌に子持たずとあるを承け
 て申し給ふなり○御名代定八田部 八田若郎女の御子の代として
 郎女の在所の百姓の群を定めたまひしなり○亦天皇云云 此條も
 大和國にて前文の話しつづきなり故に前のはなしとみるべし○速
 總別王 はやぶさと鷹のことなり別と武なり鷹に縁あるをもて名
 づけしからんされども武々しきより御名となりたるなり○爲媒

なかびとは男女の中人にて間に入る人をいふ音便になかうといふもこれなり○庶妹 ままは間々なりまを重ねてつよく云ひたるなりかきのまこといふまもおなじきなり異母兄弟は母の間おればままといふなりいもはいもとの約音あり○女鳥王 女鳥王は八田若郎女の姉なり○強 たずきとは形容詞の語にしておすし、おすしき、おすしくと變化するなりそのれずとおぢおそるゝ意これを活したるなりされば後の心のおそろしきを云ふ○汝命之妻 汝命とて速總別王をいふなり故に速總別王の妻といふ意○すべて上古は男女の間は咎めざるの慣習ありき天皇にわれ王にわれ後に召すは詔をもてすべからず意の如くするにて女の承知するものをとるなり不承知のものゝ法をもて責めずまた罪するをえざることありし○幸女鳥王之所坐 天皇は速總別王の女鳥王とみわひましたるをしらずし

て王のまします所にいでませるなり○殿戸 御殿の入口をいふ○闕 しきみのみはるどおなじく敷居なり古へとしきみといひしを後にしみると通じたるなりしきいるにはあらずさてしきみは柱と柱との間にしきゐるてあるものをいふ今のとみどのありつるがみどのなく角の木を古へはいへり例へばみぞあき門の木の如きものなり○機 はたどは織る音なりこれをさの彼是あたる音なりそれより轉じて機械の名となれりこの所をただいにさざるを云ふ○織服 みそおらせりのみは御なりそは襲なりかさねることをいふ此所は衣をかさねる故にみそと云ふなり即ち御衣を織らせりといふ意○賣杼理能 めどりのとは女王をさしたるなり○和賀意富岐美能 我大君の意にて天皇を申すあり○淤呂須波多 おろすはおらすの轉音なり波多と繒なり織らす繒あり○他賀多泥呂迦母 他賀

と誰かあり多泥のためなり豫の意呂迦母之前にいへりたれがため
 にするかまわの意なり語をかへていへばたがきものにかねてする
 ぞといふ義一首の意をいへば女鳥王の織りなせる縉は誰が衣物に
 せんとてなすかまわのころなり○多迦由久夜 たかゆくは高行
 くにて隼人の枕詞なり夜よとかなじ○波夜夫佐和氣能 とやぶさ
 わけは速總別王をさすなり○美淤須比賀泥 美之御なり淤須比之
 常の衣服を著その上に頭より著るものをかすひといふなりされば
 裁縫せず織りばなしてあるものにて衣の中を頭に被り端を體に纏
 ふものなり後世のおすひは縫ひたるものあり賀泥は豫ねて設くる
 意にてその料とせん意これよりむこがねささきがねといふも出で
 たるなり故に速總別王の御襲オスビの料なりとこたへたるなり○夫 を
 といふとめをとなればいふなりこれ女鳥王よりさしたるなり○女

鳥王歌 此歌之日本紀には速總別王の舍人の歌ひ傳へたるとある
 は異なりこれはこのままにてさしつかへあし○比婆理波 ひばり
 は雲雀なりひばと鳴聲なりりはいりなりさて小なる鳥はびよびよ
 びいゝとなくをもて小なる鳥の總稱なりされと後世之春なく鳥
 をひばりといふ古へはびよゝなく鳥をひばりと云ひたるなり○
 阿米邇迦氣流 阿米は天なり迦氣流は翔るなり空高く翔ることを
 いふ○多迦由玖夜 たかゆくやは隼人の枕詞なり○波夜夫佐
 和氣 速總別王をいふなり○邪佐岐登良佐泥 佐邪岐の佐之小な
 り岐は君なり小小君の義鶴鷄のことなり此鳥之形よりいひたるな
 りひばりと鳴聲と形によりて名づけしなり登良佐泥とはとらせ
 の延音なりとらせよといえんが如しさればささぎをとれとあざう
 たを云ひたるなり即ち天皇様の邪魔になるゆゑ弑し賜へと譬へた

るなり○欲殺 とりたまはんとすと命をとりたまへんとするなり
 ○倉崎山 此山は大和國十市郡にあるくらはし山なりこれ伊勢に
 行く道にてこれより逃れ給ふなり○波斯多豆能 ちしだてのちし
 ちすべてこなたよりかなたにわたりに上より下にわたる所をいふ
 されば物の中間にあるをちしと云ふ家の柱、橋、梯子、箸などのちしみ
 なおなちたてちちちかくるもの故にいふなり上の方にちちかくる
 をちしだてといふこれ倉の枕詞となる○久良波斯夜麻袁 久良は
 座にて物を置く所をいふ古へち藏を高く作りなして下の方ち木を
 くみあはして積みて風の通行のよきやうに構へたり今薪を積むが
 如く構へしなりされば床の高きなり高さ故に梯子をかけて上り下
 りするものと見ゆこの久良波斯夜麻は大和國十市郡にある山なり
 倉梯山をといふ意○佐賀志美登 佐賀志は嶮にて形容詞のさか

しの語根なり美と下接辞の他の語につきて熟語となるものなり爰
 は形容詞の語根に美のつきて名詞態となるなりさかしさにと譯す
 べし○伊波迦伎加泥豆 伊波之岩なり迦伎之手に力を入れてする
 こと加泥豆はできざることなり故ち岩に力を入れて上へのぼるこ
 とができざるといふ意○和賀豆登良須母 わがてとらすもとは我
 手取りたまふまわの意上へのぼることができざるをもて我手をと
 りたまふの義○佐賀斯祁杼 さかしけはさかしけれはなりけ
 とは古格にて敬辞となるなり○伊毛登能煩禮波 いもとのぼれば
 は妹登ればにて女鳥王の登ればの義○佐賀斯玖母阿良受 さかし
 くもあらずとは嶮しくまわないとの義○蘇邇 そには大和國宇陀
 郡の東の端の山中にありて今長野村、掛村、小長尾村、今井村、葛村、伊賀
 見村、大郎路村、鹽井村等の八村あるとて伊賀伊勢の堺に近き處なり

○殺しせまつりさどはしなせまつりさといふなり俗に殺しなさ
つたといふことばなり

其將軍山部大楯連取其女鳥王所纏御手之玉釧
而與己妻此時之後將為豐樂之時氏氏之女等皆
朝參爾大楯連之妻以其王之玉釧纏于己手而參
赴於是大后石之日賣命自取大御酒柏賜諸氏氏
之女等爾大后見知其玉釧不賜御酒柏乃引退召
出其夫大楯連以詔之其王等因无禮而退賜是者
無異事耳夫之奴乎所纏已君之御手玉釧於膚煖
剝持來即與己妻乃給死刑也亦一時天皇為將豐

樂而幸行日女嶋之時於其嶋雁生卵爾召建内宿
禰命以歌問雁生卵之狀其歌曰多麻岐波流宇知
能阿曾那許曾波余能那賀比登蘇良美都夜麻登
能久邇爾加理古牟登岐久夜於是建内宿禰以歌
語白多迦比迦流比能美古宇倍志許曾斗比多麻
閉麻許曾邇斗比多麻閉阿禮許曾波余能那賀比
登蘇良美都夜麻登能久邇爾加理古牟登伊麻陀
岐加受如此白而被給御琴歌曰那賀美古夜都毘
邇斯良牟登加理波古牟良斯此者本岐歌之片歌
也

○御手之玉釧 玉釧はたまは美稱ありくしろのくは手のくさはすのくきなどのくきとかななく手のすらりとのびたる所をくきといふくきたちくくたちといふもみなおきじしろは代にてしむるなりまた知るなりなはしろ、やましろのしろとかなじ故にくしろはくくしろにて手につきてすらりとのびたる所をいふそれよりうつりて手にまとひたるひぢまきをいふ○豊樂 だよは美稱なりあかりと酒を飲むと顔の赤くなるより起れりさてよのあかりは神をまつりそれにあづかるものはねをり給ふ人に下さる酒宴なり常の酒宴にはいえず○氏氏之女 豊樂のときは男女共に参内するなりさるに此所は大后のめしたるなれば女のみなりさてうぢはいつなりやそうぢをやそいつといはんが如しかくいつのある人はそれぞれに取扱はるなりされば中臣とか忌部とか藤原とかいふといつを

はめといふなりとぞ○石之比賣 大后の石之比賣の大和にいでまさざる前の事なれば女鳥王の事をしり給えざるなり○取大御酒柏 大御酒柏は前にいへりみきにしけるけしきはをとりたまふありさてかしををどるも今の盃をどるが如し而して盃をとりやりするは古今の別あり古へは盃をやるは酒をつぎてやりしなり今つかずしてやるの風なりまた古への酒はどろどろのものにて今にいへば地酒といふものあるべしその酒をしく葉は葉を組み合せてなすなりそを合とするには松の葉にてつなぎしなりとぞみつあかしはも盃の料となしたるは前にのべたり○引退 ひきそけはひきひりぞけしなりこれ見覚えのある玉釧をまさたる故に御酒柏を大楯連の妻に賜はらず直に引き退げしなり○王等因無禮而 かのみこは速總別王女鳥王をさすなりあやのゑを坐したることやはいむことに

てすわりてつつしむことなりこれ古への禮なり故に禮の事どなれり即ち禮のなきによりてといふ意○退賜　さらひはさりの延音なりきりはものをへだつものにてきりたつのきりとおなじ即ちきりたまへるといふ義○無異事耳　けなることなくこそこのけはあやしきなりこそと言ひおさへたる語なり常のことなりと知るべし故にあやしくあることとないわたりまいのことなりとの義○夫之奴手やつこのことはまへにいへりかの臣よの義○己君　おのがさみのさみは皇親をさすなりおのれが主たる皇親のといふ意○劍持　とぎもちのはぎえへぐと同じうはべにゐるをとるなりさものをはぐと同じ故にうはべにゐるをとるもちていふ義○死刑　ころすつみどのころすところかすなりそれがしなすと云に云ひなすこととなれり此處は膚の焔きに御手にある玉釧をとるもちきたりて己

れの妻に與へたるを十分罪重きをもて死刑に行ひ給ひきといふ所あり○日女島　ひめしまは攝津國西成郡にあり今と陸つづきなるが當時としまなりしなるべし○雁　かりと鳴き聲なり古へはかもをかりといひしが後と別とかれりここは雁なり○多麻岐波流　たまきはると魂極る義にて人の生涯を遙にかけていふ語なり命内世などの枕詞なり○宇知能阿曾　宇智は大和國宇智郡をいふ阿曾とはわがせおみの約音なりこれ宇智にある吾兄臣といふ意○那許曾波　なこそはは汝こそはの義○余能那賀比登　余と年なりよとひの約音なるべし那賀比登は長人なり故に年齢の長人といふにて長命の人といふ義○蘇良美都　そらみつは枕詞なり倭の上に冠らす語○夜麻登能久邇爾　夜麻登能久邇は大八洲にかけたるをここが始めなりまた大和の一國をもさすことばと知るべし此處は日本全

國にかかるなり○加理古牟登 かりこむとはかりこうむとの義う
 を省きたるなり日本全國に雁子産むとの義○岐久夜 さくやはさ
 くかいとの義○多迦比迦流 たかひかるゑ高光るにて日の枕詞な
 り○比能美古 ひのみことと日の御子にて日繼の皇子にて天皇を
 申し奉るなり○宇倍志許曾 宇倍は諸なり尤の意志と天爾波なり
 尤それこそその義にて御尤にこそその意○斗比多麻閉 とひたまへと
 とひたまふなり○眞許曾邇 まは眞なり眞こそその義○斗比多麻
 閉 とひたまへとひたまふあり眞にこそとひたまふの意○上を
 うへしこそといひ下をまこそといふといかが上をまうへにこそとい
 ひ下をまことにこそとあるべきなりいまは初雄が考へを擧げし
 み○阿禮許曾波 あれこそははわれこそなりあどわとと通音なり
 ○余能那賀比登 世の長人にて長命の人といふ意○蘇良美都云云

虚空見津大和の國に雁子持むといまだ聞かずといふにて長命のわ
 たくしでありますけれども雁の子をうむといふはいまださきさきよ
 びませぬといふなり○那賀美古夜 ながみこやと汝王よの意これ
 仁徳天皇を申し奉るなり天皇のいまだ天位に即き玉はざる前をわ
 らはしたるなり○都毘邇斯良牟登 つひにしらんとは遂に知んと
 にて終には天下を治め知しめさんの義○加理波古牟良斯 かりは
 こむらしとかりとこうむそうなの意われくのながいきしてもさ
 みのしらんためとてかりとこうむそうなど云ふ義これ王にかけて
 いひたるにこそまたいふかりの子を産むと玉の天下をしろしさん
 とての前兆にこそあらめといふべきなり○本岐歌之片歌也 ほぎ
 こことほぎなりことほぎうたをいふ片歌とは旋頭歌の半分なり即
 ち律にすべきを半分にするなりとぞ此歌を琴に弾じたるあり(琴と

はこんこんとする聲音より名となりたるあり

此之御世。免寸河之西。有一高樹。其樹之影。當旦日者。逮淡道島。當夕日者。越高安山。故切是樹。以作船。甚捷行之船也。時號其船。謂枯野。故以是船。且夕酌淡道嶋之寒泉。獻大御水也。茲船破壞。以燒鹽。取其燒遺木。作琴。其音響七里。爾歌曰。加良怒袁。志本爾夜岐。斯賀阿麻理。許登爾都久理。加岐比久夜。由良能斗能。斗那加能。伊久理爾。布禮多都。那豆能紀能。佐夜佐夜。此者志都歌之返歌也。此天皇御年捌拾參歲。御陵在毛受之耳原也。

○此御世云云 此條も一つの談の有りし事をあげたるなり○免寸河之西 免寸は誤字なるべし所在詳ならず強ひていは免と菟なり寸は幾あり而してひとおさのおを省きてとさの川と訓むべしと古人の考へあるのみなり師と全く詳ならずといはれさ河内國の何川なるにやさて此國之古今水脈の異なりて古に大川なりしも今は存せず古へなかりも今とあるものありて地勢一變せりされど此河は古は大川なるべしともかくもとさかはの西といふ義○當旦日者あさひにあたればとよむと非なりあさひあたればと訓むべし強ひていはあさひのあたればとかいふべきなりまづあさひあたればと心得べし○逮淡道島 高さ樹ありて其樹の影の朝日の東の方より出づれば淡道島にも及ぶといふ意○當夕日者 ゆふひにあたればは非なりゆふひあたればと訓むべし○越高安山 高安山は河

内國高安郡の東の方にありさて高き樹の影の夕日の西の方より照れば高安山を越ゆといふ意○枯野 からぬのらは親愛の語なり輕の字の借字なり舟をわいしてからぬといひたるありすべて此頃よりよき舟を愛してとりふねといひ後世に鳳凰丸といふなどは親愛より起りたるなり○寒泉 しみづのしはみいつなり即ちしみみづなりしみてしこはるの意めてさむくこはることなりざるをすみみづといふは非なりこのこはるみづをくむとはおほみもひの料とするなり○大御水 おほみは美稱もひは前にもいへる如くうつはの名なりそれが轉じて飲水のことにあれり○破壊 やぶれのやはよこの約音なりふれとはふれの意にてばらくとなるなり故によえみばらくとなる義○燐鹽 しほとしはからのしはあり味より出づしほむしまるといふも同じ潮水より製したるしほなり○作琴

ことはこんこんとなる音よりいふ支那に於ても然り和漢共に同義なり琴に作りたりの意○七里 さとは人の住む所ありすまとなるあり七すみかにきこゆるといふ意七里と云ふにあらず○加良怒 衰 からぬは枯野にて舟のことなり枯野をの意○志本爾夜岐 しほにやきと鹽に焼くにて鹽を作るために焼くなり○斯賀阿麻理 しがあまりはそれがあまなり即ちやきのこりなりやきあまりといとんが如し○許登爾都久理 ことにつくりは琴に製りの意○加岐比久夜 がきはそへなりひくと弾くあり夜はよあり咏歎にて切れる りかきひくよの意さてそのかきひく音のうるとしきまを云ふなり○由良能斗能 由良は淡路國の津名郡にあり能斗はの門にて由良の門なり攝津の方によりたるなり今の由良の港をいふ○斗那加能 となかのとは門中のの意門と鹽の出入する中なりそのと

の中のといふ意○伊久理爾 伊は五十なり久理はこりにて石の義
 大石の意なり石のこほしき形は大石をこりといひ小石をくりとい
 ふ海石をいくりといふなり○布禮多都 ふれたつは波の岩にふれ
 たつあり○那豆能紀能 なつと波のあらしをいふさと草にてなづ
 のさといへば芦の義なり芦は波のよりあつまる所に生ふる草なれ
 ばなりさてあづはなみのたづをないづといふそのないづのさとい
 へば波の立つ所にある草ありとの意○佐夜佐夜 さやさやは芦の
 さやくといふなりこれなづのさの如くさやさやと清涼に聞ゆる
 なりされば清々といはんが爲めに以上の句は序として置きたるに
 て長さものなりこれ清涼が主旨とぞ○志都歌之返歌 しづうたは
 静にする歌にて緩なるものなり返歌は緩なるものを急にするうた
 にて呂を律に返し歌ふなりこのこと前にいへり○毛受之耳原 も

ずのみみはらと和泉國大鳥郡にあり此陵を大なる故に大山陵とい
 ふなり

伊邪本和氣命坐伊波禮之若櫻宮治天下也此天
 皇娶葛城之曾都毘古之子葦田宿禰之女名黒比
 賣命生御子市邊之忍齒王次御馬王次妹青海郎
 女亦名飯豐郎女本坐難波宮之時坐大嘗而爲
 豐明之時於大御酒宇良宜而大御寢也爾其弟墨
 江中王欲取天皇以火著大殿於是倭漢直之祖阿
 知直盜出而乘御馬令幸於倭故到于多遲比野而
 寤詔此間者何處爾阿知直白墨江中王火著大殿

故率逃於倭爾天皇歌曰多遲比怒邇泥牟登斯理
 勢婆多都碁母母知氏許麻志母能泥牟登斯理
 勢婆到於波邇賦坂望見難波宮其火猶炳爾天皇
 亦歌曰波邇布邪迦和賀多知美禮婆迦藝漏肥能
 毛由流伊幣牟良都麻賀伊幣能阿多理故到幸大
 坂山口之時遇一女人其女人白之持兵人等多塞
 茲山自當岐麻道迴應越幸爾天皇歌曰淤富佐迦
 邇阿布夜袁登賣袁美知斗閑婆多陀邇波能良受
 當藝麻知袁能流故上幸坐石上神宮也

○伊邪本和氣命 いさはわけはいさみねはわけの約音なり後に諡

して履仲天皇と申されたり○伊波禮之若櫻宮 いはれは神武天皇
 の條にのべたり若櫻宮は宮をほめたる名なり古語拾遺講義に述べ
 たり○葛城之曾都毘古 かつらぎのそつひこは建内宿禰の後裔也
 り○葦田宿禰 葦田は葛城下郡葦田也宿禰はすくなえにて大兄
 に對したる語なり○黒比賣 黒のくはいかなりろはいろなり即ち
 いかいろにて大にうるとしき比賣なり比賣之女の稱名なり○市邊
 之忍齒王 市邊は河内國綴喜郡にある地名なるべし忍齒のかしは
 物のかさなることをいふ齒之口に生ずる齒なり故にかさなるはに
 てやえばをいふ王のやえばの生ずるによりて生づけしなり實は市
 邊王なり○御馬王 みまは地名なるべけれど詳ならずさるは前
 後の王の名を見るに地名をもて稱すれば左様に考らるゝなり○青
 海郎女 あをはおはと通ず故におはみなりおはみとおしうみある

べしこれ大和國忍海郡の地名をいひたるをあらむさておほをおしといふと忍阪を逢阪に通はし青海を大海に通はすされば常におほとわをと通はするありまたたしおみか古き言にやおほしうみか古き言にや詳ならず耶女といろつめは女の美稱なり○飯豐耶女 飯豐とみみづくの類にて鳩とみみづくとの間にあるものをいふまたみみづくと單にいへり鳥をもて名に稱せしなり○本坐難波宮之時此條は身上ばなしをいふ所にて父天皇の崩れましまして後いまだ其京に坐しはせのときの談話なり○大嘗 おほにへは前にのべたり○宇良宜而 うらげのうらと心なりげはわけなり即ちうらわげてのわを省きたるなりされば常の心を上にあげてといふ意○墨江中王 此王と庶兄なりすみのぬにすみし故に名とせしなり中は仲津子なるをもていふ○倭漢直 漢とわやををることの上手なれば

名げしなり字と借字にて元は漢人なればわやとわてたるなり○阿知直 あちのあたへは倭漢直之祖にして此人より榮ゆるなり○御馬 みまはみうまのうを省きたるなり○多遲比野 たぢひは河内國丹比那なりこれ今の丹南丹北の所なりその野をいふ○多遲比野 遲 丹比野にといふ意○泥牟登斯理勢婆 寝むと知りせばにてねやうとしりませばなり○多都基母母 多都と上に立つるなり基母と薦なり縦に立てる薦故にたつともといひたるなりすべて古と上より下に至るまでこもひしろすげひしろたまひしろなごの種々ありこれみな長く織るものなり而して家の四方にかこむはご長くなすものどぞさればねるときにそれをぐるりとたてまわすなりこれ古例にてありしが後にたてたるをよこに竹を作りてつけるなり必ず大嘗會のときたつこもを用ゐるなり後にこれに代ふるに布を

卷さしとぞされば竹をとほしたるなり○母知氏 持ちてなり○許
 麻志母能 來ましものにてきましやうものをの意○泥牟登斯理勢
 婆 寝むと知りせば立つるこもをもちてきましやうものをの意を
 り○波邇賦坂 はにふさかは河内國丹南郡にある坂なり○猶炳
 なほわかみえたりはやはりもとの如くわかみえたりといふ意
 ○和賀多知美禮婆 吾立見ればの意植生坂に吾立ちて見ればの義
 ○迦藝漏肥能 かぎろひはかぎりひなりりひを延ぶればろひひと
 なるなりそれを約むればかぎりひとあるなりさてかぎろひはか
 かやくひにてかきはかかと同じく空に光の映することなりされば
 映する火をかぎりひといふそを延ぶればかぎりひとなるなりこれ
 火事のはのをいひたる所にぞある○毛由流伊幣牟良 毛由流は
 燃るにてかがやく火のもゆること伊幣の家なり牟良は群なり故に

家のたちたるところをいへむらといふなり○都麻賀伊幣能阿多理
 都麻は妻なり伊幣は家なり阿多理は邊なり即ち妻之家の邊の意
 にて我思ふ妻のわたりなりとよまれしかりここに於て酒も覺えた
 るやうすなり○大坂山口 葛城上郡の大坂の山口なり○兵人 つ
 はものはつきものにてつきはうるとしきものをいふ而してつきと
 つびと同じく美麗なる意これが遂に兵器を持たる人を云ふになれ
 りさるをつはものをつばのあるをもつ人なりといふは非なりつば
 はすみえにて異なればなり○當岐麻 たぎまは葛城下郡の當麻な
 り○阿布夜袁登賣袁 かふやをとめをとと大坂に逢ふよをとめにと
 の意○美知斗間波 道をとへばなり○多陀邇波能良受 直には告
 ずの意にてすぐにはいはすの義○當藝麻知袁能流 當麻路を告ぐ
 の意にてわれにたぢまのみちを告げたことであるといふ義

於是其伊呂弟水齒別命。參赴。令調。爾天皇令詔。吾疑汝命。若與墨江中王同心乎。故不相言。答曰。僕者無穢邪心。亦不同墨江中王。亦令詔。然者。今還下而殺墨江中王。而上來。彼時。吾必相言。故即還下。難波欺所近習。墨江中王之隼人名。曾婆加理。云若汝從吾言者。吾爲天皇。汝作大臣。治天下。那何。曾婆訶理。答曰。隨命。爾多祿。給其隼人曰。然者。殺汝王也。於是曾婆訶理。竊伺己王入廁。以矛刺而殺也。故率曾婆訶理。上幸於倭之時。到大坂山口。以爲曾婆訶理。爲吾雖有大功。既殺己君。是不義。然不賽其功。可謂無。

信。既行其信。還惶其情。故雖報其功。滅其正身。是以詔曾婆訶理。今日留此間。而先給大臣位。明日幸留其山口。即造假宮。忽爲豐樂。乃於其隼人。賜大臣位。百官令拜。隼人歡喜。以爲遂志。爾詔其隼人。今日與大臣飲。同蓋酒。共飲之時。隱面大鏡。盛其進酒。於是王子先飲。隼人後飲。故其隼人飲時。大鏡覆面。爾取出。置席下之。劍。斬其隼人之頸。乃明日上幸。故號其地。謂近飛鳥也。上到于倭。詔之。今日留此間。爲祓禊。而明日參出。將拜神宮。故號其地。謂遠飛鳥也。故參出。石上神宮。令奏天皇。政既平。訖。參上侍之。爾召

入而相語也。天皇。於是。以阿知直始任藏官。亦給糧地。亦此御世。於若櫻部臣等。賜若櫻部名。又比賣陀君等。賜姓。謂比賣陀之君也。亦定伊波禮部也。天皇之御年。陸拾肆歲。御陵在毛受也。

○伊呂弟水齒別命 いろと親愛の語とはおとうとちりみつを瑞ちり齒之はちりわけは武なりみつしきはをもちたるより名とちりこれうるはしきみはなればなり○汝命 ながみことをとながみことよといふがごとし○同心 おやじころのねやじは意の少し異なるなりさていはんにおなじのなそのの轉じたるにておのれといふなり即ちてまいと同意あるが元なりそれよりうつりて物と物と呼びて同様同類となれりこれおのれと對したる語なり常

にれやじといふはつかはぬことばなりされざいづれも古き語にこそわらめ○彼時吾必相言 そのとさにこそあれかあらずあひはめどのらしめたまひきとあるこそは除くべし必と云ふときはこそはなくてよろし○隼人名曾婆加理 とやびとはさつまひむかの人にていちとやびとの意なり即ち武勇の人の義曾波加理はいちはやびとの名なり○大臣 おほおみは臣の頭と云ふべきなり(おほおみのくはしきことと建内宿禰の條にいへり)○隨命 みことのままにまのまにまたままになり命の任にの意○多祿給 ものさはにたまひてのさはさははなり即ちものさはとにたまひての意なり○以爲 おもほさくはおもほすの延音なり○大功 おほさいさをのいさとすすむ意をはをしきあり功の字にあたるをいさをといふ故にすすみををしき事のある人のなしたるなり○不賽其功 むくいの

七十六
むくをむけにてむかせの約なりむけゆく形をいふかれのために恩
のわるをむけゆくをいふなりさればむくいすとぞいふ此處はすす
みををしきことをなしたる恩にむけゆくことなさずばの意○惶其
情 かしこゝおそれかしこきことなりこゝを曾婆迦理をいかすと
きは大臣になすべきにもあらず我は天皇とあると云ふがおそれか
しこきことであるといふ意されば誓約の如く行ひなば却て大臣と
なし天皇となると云ふことがおそれ多しといふなり○正身 むざ
ねのむえみなりさは身なり身の本なりねと草木のねと同じさて身
のうつりてからだといふになれりこゝもからだの義○滅 ほろぼ
すのはろはえらえらのはらとかな故にはろぼすべらばらにな
すの意○位 くらゐのくらゐ座なりゐる居あり天皇にめみねをす
るとききの座席のくらゐなりまたいふ位に登るときは天皇のつつし

みて私にせずされば新殿を作り神を祈り豊明をなして曾婆迦理を
せに位を定めしなり○飲同蓋酒 おやじつきのさけをのみてむと
すのてむは例の通りわろしのまんとすとよむべきにこそおなじ盃
の酒をのまふといふ意○共飲 ともにのますともに見たまふ
ときなり即ち大盃を與へたるわざをいふ○大鏡 まりは形の丸よ
りいひたるなりまろのまりと轉々たる語なり大は形の大をたへ
たるなり○席下 むしろのしたはしきもの下をいふ○頸 くび
は身体のかぼかなる所をいふ○明日 くるひは来る日にて明日の
ことなり○近飛鳥 ちかつあすかは河内國あすかべ郡大坂の地を
いふこれと初めちかいあすかといひしなり大宮より近いといふ意
○遠飛鳥 とはつあすかは大和國高市郡にある地をいふこれ墨江
の皇子のあすまゐでてといふて大宮に遠きをいひたるなりさてあ

すかは清見が原なり飛鳥といふは赤き鳥といふとてとぶどりの
 あどかけてあすかといふこれ借字なり春日野のかすかといふが春
 日をかすかといふと同じ義ありさすれば飛鳥の赤き春日野のかす
 かといひしがその語のうつりて飛鳥をあすか春日をかすかといひ
 しなり○政 まつりごととまつろひごとの意○任藏官 くらいつ
 かさそ年貢をとりあつかふなりこのころと織りものを多く奉る故
 に漢人のみを用ゐしなりされど阿知直は功あれば藏の官となりた
 るなり○粮地 たごころは田所にて地面を賜はりて田地とあすな
 りこれ食料の土地をいふなりこの處は地面を賜はりて田地とな
 し又たごころは別に賜はりしあり○若櫻部伊波禮部 此部曲は履
 仲天皇の大御代の名代として残されしなり而していこれのわかざ
 くらを別けて二つになし部曲を立てたるなりまたいふ若櫻部臣等

とあると後世云ふをめぐらしていへるなり此のときにと群の名を
 たまふと云ふが元なり比賣陀君等とあるもおなじ此君と彦坐王の
 後裔なり○毛受 和泉國大鳥郡にある地名あり
 水齒別命。坐多治比之柴垣宮。治天下也。此天皇御
 身之長九尺二寸半。御齒長一寸廣二分。上下等齊。
 既如貫珠。天皇娶九邇之許碁登臣之女。都怒郎女。
 生御子。甲斐郎女。次都夫良郎女。柱二又娶同臣之女。
 弟比賣。生御子。財王。次多訶辨郎女。并四王也。天皇。
 之御年陸拾歲。御陵在毛受野也。

○水齒別命 後に諡して反正天皇と申されたりさてみづと瑞ふて
 御齒のうるはしさを以て稱へり元みつはみいつのいの省けるにて

みは御なりこれ御齒の狭く長く等く整たる上下の御齒にして例令は櫛の齒の如くてうるはしきをいへり其に依りてみづはわけといひたるなりわけは皇子等の尊稱の言なり此事日本紀にもかくなり
 ○多治比 之河内丹比郡なり○上下等齊 御齒の上下をいふ○齊とどのふと元いといとと云語のいを省きて唯單にととなりたりとといと美々と云事にて某都怒姫とあるも同義あらんさて此といのふと活言にてといのふとといのふといのふといのへと活くなり而して茲になふのふのけじめをつくべし彼のうべなふつくなふわたなふ等のなふと物をなす方の用ぬのふは物の自然にある方に用ゐるなり故に茲の齊は御齒の美々に自ら成居事をいふ○九邇之許基登臣之女 ぬには大和國添上郡奈良の側に在る地名なり其處に居る故にぬにの某といふ此先祖は孝昭天皇の皇子天押足彦命は

九邇之祖なり○許基登 はことなりいこといかしき(嚴)の嚴の義されは嚴言の意なりされは物の言通る義にて許基登産日神のも同じ義なり此魂神之中臣の先祖天兒屋命の御父にて辨の能よき人なりとぞ○都怒郎女 いづぬしの義いを省きしを約めてつぬといひたりこれうるとしきぬしの意なりぬと親愛いらといろと同く親愛女は美稱なり○甲斐郎女 かひとくみの義又轉してかともいふ元くみはくしみなり其れよりくみともかみともいふなり○都夫良郎女 つはいつの義ふはびと同義らと親愛つふは即ちつびと同義く美麗の義なり彼の葛城園とあるも同義也○弟比賣 いまをといめなり○財 らは親愛色の義即たかいろなり○多訶辨 かもの一名今の小かもならんそれを古へたかべと云ふ鳥の名によつて人名につくることは此ときの風習あり○毛受野 和泉國大鳥郡毛受野

男淺津間若子宿禰命坐遠飛鳥宮治天下也。此天皇娶意富本村王之妹忍坂之大中津比賣命生御子。木梨之輕王次長田大郎女次境之黑日子王。次穴穗命次輕大郎女亦名衣通郎女。御名所以衣通王者其身之光自衣通出也。次八瓜之白日子王次大長谷命次橘大郎女。次酒見郎女。凡天皇之御子等九柱。男五女四此九王之中穴穗命者治天下也。次大長谷命治天下也。天皇初為將所知天津日繼之時天皇辭而詔之我者有一長病不得所知日繼。然大后始而諸卿等因堅奏而

乃治天下。此時新良國主貢進御調八十一艘。爾御調之大使名云金波鎮漢紀武。此人深知藥方。故治差帝皇之御病。於是天皇愁天下氏氏名名人等之。氏姓忤過而於味白禱之言八十禍津日前。居玖訶瓮而定賜天下之八十友緒氏姓也。又為木梨之輕太子御名代。定輕部為大后御名代。定刑部為大后之弟。田井中比賣御名代。定河部也。天皇御年漆拾捌歲。御陵在河內之惠賀長枝也。

○男淺津間若子宿禰 諡允恭天皇と申されたり男の字之發語なり
うつくばなどの例也あさつま大和國葛城郡淺津間なりすくねは作

動及心の清潔をいふにてすかねの意即清根の義なりざるを世にす
 くなひと説ありそは上に立つ者を大兄といひて下に居るをすくな
 ひと云ふはわしき説なりまた皇族を大兄といふ故にすくねと臣下
 の稱号なりなどいふはいたきひかことなりざるを以てきよきねは
 みたがらと同くきよき心をいふ稱号にて姓のすくねもかくなり○
 遠飛鳥 履仲天皇始め河内國に都をなされざる前難波にまします
 とき墨江中主謀反す帝大阪山口に逃れ出つ故に號其地謂近飛鳥今
 河内安宿郡飛鳥村これ難波より近きを以てなり又同時に上到于倭
 詔之今日留此間爲被禊而明日參出將拜神宮故号其地謂遠飛鳥(今大
 和高市郡)これ難波宮より遠きを以てあり後世あすかといへと唯大
 和のあすかをいふ○意富本村王妹忍阪之中津比賣 意富本村王
 又大郎子といふ若野毛二侯の皇子應神帝の孫あり(若野毛二侯命ハ
 應神帝皇子也)

日本紀之若野毛二侯命皇子意富本村王之妹忍坂中津姫とありたり
 さるを古事記中巻頁二〇五 應神帝皇女に忍坂中津媛あり其他頁二八〇
 品陀天皇之御子若野毛二侯王生子大郎子亦名意富本村王次に忍阪
 之中津媛とあり下巻頁八二にも中巻頁二八〇と同意なれば中巻頁二〇五
 は誤なるへし忍阪は城上郡忍阪なり大中津媛は仲子にて其内允殊
 に尊むべき方なれば大中津とはいへるなり○木梨 こなしと訓む
 べし允帝皇子ましますさす故を以て後人御しわさのわろさいやしき
 を以てこなしのかるの皇子と申したりさて輕は高市郡輕の地名に
 て數人此處にましますを以て此内にも別てかくいひたるあり○長
 田 は攝津國八田郡郡長田なり○境之黒日子 境は高市郡境住居
 地の名なりくろはいくろにていかいろの意而していくろのいを省
 きてくろとせしなり○衣通郎女 衣は御衣の衣なりさものゝ事通

は御身体の光輝が御衣を貫きて通るを云ふ字名なりされはこれのう
 るとしき美女の字名と遂になれりさて中巻^二八〇藤原之琴節女と
 あると此そとはしと同一義にて唯となへの異なるなりすべて各
 處に衣通郎女と數人あるは一人の名に非ず數人の名なり如何とな
 れは此名か美女の字なればなり〇八瓜之白日子 大和國高市郡八
 瓜白日子の白之色の純白の意元しはすと通してすかの義されは清
 と同く又しの字に清をあつろと親愛のいろなり〇大長谷命 元よ
 り長谷と云はれたれと天皇に立給たれは大長谷といへるなり〇橋
 大郎女 大和國高市郡橋村今橋寺の在所なり〇酒見郎女 さかみ
 とさかひなりみひ共に通すされは境之黒日子のさかひと同義(さかみ
 ふと同例)云たけち郡境なり〇辭 いなはいやなりびは形状なりこ
 れ中二段形容の活きなり〇うへはへ うちはそへなりはへは長く

延ひるなりこれ長病をいふ〇かたは 辭して許るさす〇諸卿
 まへつきみはまひいつきみなり即天皇の御前に齋き侍る君達なる
 を以てまへつきみといふなり〇國王 くにさしといふは邦言なり
 〇八十一艘 日本紀に八十艘に作る此書之八十一に作る神功皇后
 の始めてのときと八十一艘なりさいづれにてもよかりき〇金波鎮
 漢紀武 金は氏也波鎮漢紀之彼國の官也武は名也されは金武と云
 人あり〇藥方 藥を作る術を知れり元くすよくしびにて病の靈に
 癒ゆる故にくすりといふりと親愛なり〇治 物の蔓延するものを縮
 むるををさめるといふそのおと發語さむるはしむるの義されはし
 めるとも同義國を治家を治病を治等皆ひかさめしめるをいふ〇
 氏氏名名 うちとみしつ也人の器量の勢に依てあるにてその物事
 を執りて名とするは氏なり中臣氏と神と人との中間をとるもつ人

にてなかつかみといふか如し皆其人のみいつなり名は人の物をなすからの名にて物を爲事か名となるなりされはなすも名も同義傳に名と成也とあると悪し名となす也と云ふべしととりべゆふつぐり此等はなすところから出づるあり右孰れも同様なれど元をいへと古より二つに分流せり後世は氏氏の人々といふべきなり○うちかばね 此氏の内には名も交りたるなり氏はみいつありかばねかばねかびともかみともいふてねと根ありされとかみねといふも可ならん又轉してかんのねとも云ふ此かかねといへと元のねざしをいふされと先代よりのねざしなり此等は身体につきての稱なり(ねしかばね)すくねなどはかねなり即姓をいふ藤原某朝臣といふも同じ(は姓は身体につきていふ)○あまかし 高市郡あまかしあまかしの岡ともいふなり此所にて言の八十禍津を正さんとての所業なり○玖訶

玖訶とは大なる意數多をすたといふ大分をいへりされとかばねか(嚴)の意にて此かをくかど云ひて大なる事になせりへは釜也古へ平かなるもの皆釜といへり(かなき)故に茲もくかへといへと大釜の事ばちす今田舎等に於てとすいふろをこがといふもくかの變轉あらん○八十友緒 八十は數の多きをいふともはむれならんをこそとの意されと數多の部曲の長の氏姓を定むるにや○刑部 と書するは此地より斷決する人の能く出來たりしかば名つけに非す必しもあさかべといひたるにて刑部にあらずされと此郷なる忍阪部の人等の刑部の職に仕奉しことありしなり○田井中比賣 此は應神紀中卷二頁皇女川原田耶女とあり之れ誤なり應神帝皇子の若野黒川先生なりいへり即ち應神孫二俣王皇女川原田耶女と田井中比賣と同人にて事確定せり故を以て河部を定む

にてなかつかみといふか如し皆其人のみいつなり名は人の物をなすからの名にて物を爲事か名となるなりされはなすも名も同義傳に名を成也とあるを悪し名となす也と云ふべしととりべゆふつぐり此等はなすところから出づるあり右孰れも同様なれど元をいへる古より二つに分流せり後世は氏氏の人々といふべきなり○うちかばね 此氏の内には名も交りたるなり氏はみいつかりかばねかばねかびともかみともいふてねと根かりされとかみねといふも可ならん又轉してかんのねとも云ふ此かかねといへる元のねざしをいふされと先代よりのねざしなり此等は身体につきての稱なり(ねしかばね)すくねなどはかねなり即姓をいふ藤原某朝臣といふも同じ(姓は身体につきていふ此)○あまかし 高市郡あまかしあまかしの岡ともいふなり此所にて言の八十禍津を正さんとの所業なり○玖珂

瓮 玖珂とは大なる意數多をすたといふ大分をいへりされとかは(嚴)の意にて此かをくかど云ひて大なる事になせりへは釜也古へ平かなるもの皆瓮といへり(か)故に茲もくかへといへる大釜の事はあす今田舎等に於てとすいふるをこがといふもくかの變轉あらん○八十友緒 八十は數の多きをいふともはむれならんをこそさの意されと數多の部曲の長の氏姓を定むるにや○刑部 と書するは此地より斷決する人の能く出來たりしかば名つけに非す必しもおさかべといひたるにて刑部にあらずされと此郷なる忍阪部の人等の刑部の職に仕奉しことありしなり○田井中比賣 此は應神紀中卷二頁皇女川原田郎女とあり之れ誤なり應神帝皇子の若野黒川先生之孫なり即ち應神孫二俣王皇女川原田郎女と田井中比賣と同人にて事確定せり故を以て河部を定む

天皇崩之後。定木梨之輕太子。所知日繼。未即位之間。奸其伊呂妹輕大郎女。而歌曰。阿志比紀能。夜麻陀。袁豆久理。夜麻陀加美。斯多備。袁和志勢。志多杼。比爾和賀。登布伊毛。袁斯多那岐爾。和賀那久都麻。袁許存許。曾婆。夜須久波陀布禮。此者志良宜歌也。又歌曰。佐佐婆爾。宇都夜阿良禮能。多志陀志爾。韋泥。豆牟能。知波。比登波。加由登母。宇流波斯登。佐泥斯。佐泥。豆波。此者夷振之上歌也。是以百官及天下人等。背輕太子。而歸穴穗御子。爾輕太子畏而逃入大

前小前宿禰大臣之家。而備作兵器。爾時所作矢者。銅其箭之內。故身其矢。謂輕箭也。於是穴穗御子興軍。圍大前小前宿禰之家。爾到其門時。零大氷雨。故歌曰。意富麻幣。袁麻幣須久泥。賀加那斗加宜。加久余理許泥。阿米多知夜米牟。爾其太前小前宿禰。舉手打膝。憊訶那傳歌。參來其歌曰。美夜比登能。阿由比能古須受。淤知爾岐登。美夜比登。登余牟。佐斗毘登母由米。此歌者。宮人振也。如此歌參歸。白之。我天皇之御子。於伊呂兄王無及兵。若及兵者。必人咲。僕捕以貢進。爾解兵退坐。故大前小前宿禰捕其

輕太子率參出以貢進其太子被捕歌曰阿麻陀牟
加流乃袁登賣伊多那加婆比登斯理奴倍志波佐
能夜麻能波斗能斯多那岐爾那久又歌曰阿麻陀
牟加流袁登賣志多爾母余理泥豆登富禮加流
袁登賣杼母故其輕太子者流於伊余湯也亦將流
之時歌曰阿麻登夫登理母都加比曾多豆賀泥能
岐許延牟登岐波和賀那斗波佐泥此三歌者天田
振也又歌曰意富岐美袁斯麻爾波夫良婆布那阿
麻理伊賀幣理許牟叙和賀多多彌由米許登袁許
曾多多美登伊波米和賀都麻波由米此歌者夷振

之片下也其衣通王獻歌其歌曰那都久佐能阿比
泥能波麻能加岐賀比爾阿斯布麻須那阿加斯豆
杼富禮故後亦不堪戀慕而追往時歌曰岐美賀由
岐氣那賀久那理奴夜麻多豆能牟加閑袁由加牟
麻都爾波麻多士此云山多豆者是今造木者也故追到之時待懷而歌
曰許母理久能波都世能夜麻能意富袁爾波波多
波理陀豆佐袁爾波波多波理陀豆意富袁爾斯
那加佐陀賣流淤母比豆麻阿波禮都久由美能許
夜流許夜理母阿豆佐由美多豆理多豆理母能知
母登理美流意母比豆麻阿波禮又歌曰許母理久

能。波。都。勢。能。賀。波。能。賀。美。都。勢。爾。伊。久。比。袁。宇。知。斯。
 毛。都。勢。爾。麻。久。比。袁。宇。知。伊。久。比。爾。波。加。賀。美。袁。加。
 氣。麻。久。比。爾。波。麻。多。麻。袁。加。氣。麻。多。麻。那。須。阿。賀。母。
 布。伊。毛。加。賀。美。那。須。阿。賀。母。布。都。麻。阿。理。登。伊。波。婆。
 許。晉。爾。伊。幣。爾。母。由。加。米。久。爾。袁。母。斯。怒。波。米。如。此。
 歌。卽。共。自。死。故。此。二。歌。者。讀。歌。也。

○未即位之間 諒闇三年と云事ありて皇太子御喪によりて未だ即位しろしめさず故に空位のまゝあるなり茲もそれと同き也○伊呂妹輕 はいろいろものかるなり同母の妹をいふ住所輕を名とす○奸 たはけたはいたなりされはみいつはけなりはけはみいつのしまりのなくなるものにてほけるなり故にはげは今のとほけにてと

ぼけはとこゝろのほけなり○斯多備袁和志勢 斯多は土の下なり備は物を通するもの筈も同義なり織の筈も同じ和志勢とわしらせのらの略せるもの古今らりれろを畧す數例あるなりいもいわすともいへりさて水の自然に行流をわしるといふいとはしるるともいふさるを通らするをわしらするといふ也○志多 は心中にてする事○伊毛袁 伊毛與といふべし○妻 と男女共に通じて云釋稱語也○許存 は去年の事こは來る事にてきをことも云ふどはつこなきさつぐつぐしともみなおなじ物のすぎゆくをすごと云ふなり也さつきたとも云ふ後世は去年のみになれり古へは一年一日經ればこそといふなりこそにするところはまゝを釋す○ふれ と四段活にてれにてこそその結をなすそはこそやすくただをふるれと云ふはやはなりこれらの事はわるまじさにこそ○志良宜歌 そはしりわけうたな

り調子を漸々に高くするなりこは哥樂寮にて歌とさの節にてそれ
 らかつたへられたるなり○さゝは風のさゝりて葉のさゝとなる響
 より名となりたるなり○うつはものをたゞくうつにあらずこれ
 に二つあり一はものゝうへのなるをうつといふ一をものをうつを
 いふされは此うつやあられとあるはさゝのはのうへにあられの
 るを云ふ言を換へて云へはあられのうへになるを云ふ馬の背に荷
 をうつといふも同じ○多志陀志 せしゝとあられのふる音をい
 ふ古へはだしゝといひたるものとみゆたしゝと物のたらしゝ
 と云ふ言にて十分なり○比登波加由登母 どんなに人かそうだん
 なすともなり天岩屋段にみゆ○うるはしと うるをしいもとの義
 なり○佐泥斯佐泥 佐は發語根と根なりてはねたならばとの意○
 美陀禮 四段活にてみたらんみたるみたりみたれと活くばは將然

言にてみだれやうならみだれよの意義なり○夷振之上 鄙風にな
 して調子の漸々音を上て云ふ歌なり此も歌樂寮にて○大前小前
 は兄弟にて一所に居るを以て名を別ずして合して書きたるあり○
 つはもの 傳に云はれたるそつべのあるものといふと非也いつびの
 あるものにて威靈なるものをいふ○内 傳に依て前にあらたむ
 べし○鉄の箭 は其前より世に行へられたれと猶又此より確定せら
 れたり○ひぢ 鉄にて作るといふ○ひさめ 電ひやうなり大ひさめ
 ともいふ○よりこね はよりきたれといひて奈行變格命令なり○
 かなて かなと物をかなしむのかなにして感ずる義されはかない
 でなり物に感ずるときは何か身振するもの也さてかなでかなづと
 同く義通す○美夜比登能 大宮人がの意に見るべし○阿由比 足
 結と傳にあり古へ袴の上を緒を以てだぶつかせすにするために奇

せしかり多くて旅行の時に用ゐるされど後世にありては脚半出來きてこれを充つその袴をゆふところに鈴をつくといふ○佐斗毘登由米 小鈴を落たといふて宮人たまわくされど里人たまわゆめつゝしめこれ大宮人に對して里人を云ふてゆめつゝしめといふためなり○宮人振 すべて宮人のうたふ所の歌此後數多われどこれか元歌となるをいふ此も又歌樂寮にてうたひつたへの調子ならん○天飛 たむ たまふとふと同じたまとの轉言ふとむの往來言なり即ち五の一に變ずる也○輕 は大和國高市郡輕なり輕大娘之住居地名を名に負ひたるなりけりいたはいと也だをどに轉せしなり即ちはなはだしくないたならんまたいとなかばの義○那久 は古人久の字はけの誤ならん黒川先生のいへるは介の字の誤字ならんと○波佐能夜麻能 は波斗能の序言也波佐能は即長谷山觀音寺の在所

今の大阪城上郡觀音寺所なり古くははさなせとも云へりなせははさと云ふてなさまの義はさまを省略してはさと云ふ其義のなさまはさまるの意にて間と間とのあわひを云ふまるとは形狀言にてといまるしづまるのまるの如く也これと山と山との間なればなさと云ふありはさと云ふはなつせの約たる也はつせと云はなつははたと云ふか如きとにはたくもはつをなとの如く長き事を云ふ意せはせまき也即ち長狹なるところを云ふ故に長谿と云ふ義即ちなつせと義訓なりこれははせとつめていふ今もはせと云ふ○波斗能は鳩の如く小聲にてなく也○斯多那岐爾那久 心中にてなくをしななき忍びなき也鳩の聲之喉にてなくを以てなり雉子などのやうに音をたかくせぬやうする也○志多多爾母 となしたしたにも義もたまわなる咏嘆ある詞忍び忍びにたまの義也○余理泥豆登富禮

万葉に多く見ゆよりねしいもにてよりそうてねる義傳にかくれる意にとれるはいたさわやまりなりさてこの意はよりねてゆけどの義にてとはれと云ふ也ゆけの義訓なる○加流袁登賣杼母杼母はつびにて威靈の義古へは多人敷に用ゐる所と又一人をさしても用ゐる所とありたりこゝは一人の所なりされと後世はみな等の義にときてたちの意即ちつびはたちなり○伊余湯 今も温泉郡也是は温泉のわれは也されと温泉に遣されたるに非ず其處に追捕されたる也さて此處の節は日本紀の傳と異なり紀には娘の追捕されたる所ありされと此記には見えざれと此まゝにすておくべし○鳥使ぞの上にて天飛とあるは枕詞にて空飛の意なり而して空飛鳥の使にぞある義にぞのにを省きて使ぞといへり○多豆賀泥能 賀はてにはにて梅が枝などのがと同じさて鳥の中にて美麗ければたつ

といへり龍のたつもたつと云ふと同心にてみな美麗なりされたはいたさなりつはいつなりねはこゑ也これらは神世よりの習しにて鳥を使にするは名無雉子を始として古禮也西洋にて鳩を使になすも同例なりこの意は使者と思ひて無事を問ひ給へ語をかへていへはとひわそばせなりとひを延言してとはさねと云ふのならさねのねの如く形状言にてのべたる也○天田振 此の如き振合の歌われとこれか元歌となりて雅樂寮傳ふ○意富岐美遠 古へ帝王皇子等は自身の事をおほきみみてみわしみかどなとといへるとぞ○志麻爾波夫良婆 手前のもさしまる所をしまといふさればいよをしまともいふそのしまるはとまる也即ちさかひのといまるを以てしまといふなりとふるも即ちはなちすつるの義にて古言ばらくにするより出来たりそれより都をはなつよりと云ふらは將然に

て追捕したならの義○布那阿麻理 ふねあまりねとなどは一音に
 轉すこゝにて一つの体言になすされは船の小なるにのりされす殘
 る人をふなまりしてと云ふ也○伊賀幣理許牟叙 伊之發語いかへ
 りこんにそあるの義○和賀多々彌由米 わがいたどころの疊をけか
 してならんゆめはつゝしめさてたゝみはたゝむなり紙を二折にな
 すか如く古をむしろなどのもわれみな一重にひき又二折四折にな
 して居る故にたゝむと云ふ唯一枚を敷きてたゝみとも云はず天
 皇の大嘗會のとき八重たゝみと云これらは故事にてすべて旅行な
 したる人の疊をけかすときは旅人の凶事あるを以てこれををさな
 くよみし也○ことをこそ ことばこそ也いゝめいゝほうかまわな
 り○かるの いらつめは他人の思を付けてくれるなよときよめて
 これを云ふ○夷振之片下 日本紀わぢすきたかねひこのかみの殿

かひこねのあまさか立也哥に合せていふこれ元哥あり片下は中こ
 ろより漸々に調子をひくくするあり○衣通王 ちかるの大娘なら
 ん○夏深草 わひえ向草のいひなりなひえなびくありなべなへく
 わひなへをつめてゆひねと云ふ今のいよ國にさこゑすざれといよ
 のはまべなるへし○かきかへ かきはかきはの如さかたきの活き
 をかたと云かたきかひなり○阿斯布麻須那 佐行四段敬語なりち
 はせいするななり往ちかへるなのななり○あかし はらちをわか
 すと同くそこをひろくすることさて此詞わかんあさわくと活くな
 りされば其意をひろくしてとほれゆけなり○岐美賀由岐 君は輕
 の君也賀はてにはゆきえ行きり体言になす即ゆくかの義○氣那賀
 久那理奴 さへがちがくいぬなり即ち月日の長くある義○夜麻多
 豆能 能え如きの義むかへの枕詞さて古人此山たづを深くわけつ

らはれたりたつはつちなり威の重りたる意訓我師黒川翁云ふたつ
 の木に二種あり一種は草のたつの事にてこれもたつとぞよふ字に蒔
 藿とかきてそくそくそくづともいふこれ誠にたつなりさて此草之
 足のひびれからたのいたみを癒す等の功能ありそのしかたはよく
 もみてたでつけ又すつてつけなどすされ之もみたでる所よりたつ
 の草名をもたでと變せしならん今一種は山たつといふて木なりこ
 れ半地に生るたつに對して云ひ又よく其形の似たれはかくいふな
 り例令は牛地に生るいもありこれに對してやまいもといふとある
 か如しさへ山たつは今は俗にはとこといふなりこれも同じく草
 たつと同功能をもちてたでる義なり故に元たつと云べきをたでと
 三の音に轉じ同意味也○牟加閉袁由加牟 牟加閉は二葉相向ふよ
 りいふ故に古人皆山たつといふてむかふにかゝるといこれたりさ

にあらず師云万葉集等に見ゆてみ奇むかへにかゝるなり何となれ
 はむかへは山たづのしげることむかへなれとなりそのむかへは
 いぐと云ふと同くむかもの例也又むくさくの如し即ち茂の意む
 くのむを一音まに轉す而してむかへとなるときとむかへにて茂
 生の義なり假令は木を斬りその元の如くむかへはへるあり生はえ
 えなりへとなすそのへは苗の如く若苗若木を云ふさて山たつのむ
 かへを迎へにかけてむかへにゆかうとなり袁はなだらめてつけ味
 嘆言也○麻都爾波麻多士 まつにはまたれぬそれ故にこちらより
 ゆかう也○造木 たつげはわろしみやつときと訓むへし國造の造
 を借りてつけし言ならんしてみやつときは凡此頃の言ありさて國
 造は古へよりわけて後に職掌變して神祀を祭りそのときに用ゐる
 木之にことこなりされと國造の此木を以て神を祀りたれは造木と

いふちり故に之をみやつこきと云ふ眞淵翁之斧なりとの説はわろし斧をたつげと云ふに合するにわらずさてまたにえとこをたつげと云ことなしこれ全くたつと云ことわりけはきなりされはたつきたつげのと云もあり木をたつと云事あり○待懐 かるのみこのまぢかもふるなり○許母理久 こもりどころくはどにて所也またくぬをくとつむいづれにても取るべしと師いはれたり○長谷山 はこゝにゑんわれはなり○意富袁爾波 は狭尾に對しまた高低に對すをと山のしなへなり例令はをゝるたをゝなり山のしなふところををといふ山の半腹をいふ義されは尾上は半腹の土なり○そた 田畠のはた也はたのほりとの説わろしはりはほりと同くかいこんまひばりは新開田也たてはたてすの義にてはりおこすことなり○佐袁表爾波 佐は發語をは小なる也これまで歌の序文也○意富袁爾

斯 おほにその義○佐加佐陀賣流 大と小との間を中と云さはしなをつゝめてさと云ふしきはしなふなりされはしなひためる(たはひる)也而してしなひたはひはかるの娘の思妻阿波禮にかゝる言にてこれ互にたもふの義あはれは咏嘆言也○つくゆみ はつきもみなりのは如くの義○許夜流許夜理母 伏る伏りも也こやるそくやる也物のくやくするなり人の糸るそとこころなくしてくやくするなりこやりは体言にてこゝはふすふしもあり傳にふせおくに説れたるはわろしつくもみはねればねるかこせばおこすちり故にこやすはねればねるなり○多豆理多豆理母 多豆理の理は流の誤許夜流と向へは流なりされはたてりてりてのいひなりたちとありたちでありもなりゆみは心のまにくく自由自在になるものなれば月にたどへるなり○後も其前もとり又其後もよりえるなり○いく

ひはいはいひの義いはひくひなりくひと云へはかんくひかさね
 のくひの如しさてくひの元はくいたち生ずる也直くに生ひたるも
 のゝ名ありくゝおひの義古へはくひととはたるさかたるくひとあ
 りくひを用ゐるからくひとあれりいくひとかのくゝおひの木を以
 て川中にうつなり木の枝葉のさかきをうつなりこれ玉鏡をかけ川
 神をまつる也○まくひ はうまくひ也枝葉ゐるものをうつなりこ
 れも前と同じき○阿理登伊波婆許曾爾 大和國にわりどころの義
 爾はなとなく味嘆のなわなり古きとてにをえに用ゐたり宿禰段に
 まこそにとひたまひとありこれいはゝこそにと同じにの字と意を
 解すときは省く此詞間投詞なり○自死 自の命をしなせたるあり
 ○讀歌 はつぶくゝとよみかぞへてうたふなりいまのうたをよむ
 と同じ雅樂寮にて傳へし也

穴穂御子坐石上之穴穂宮治天下也天皇爲伊呂
 弟大長谷王子而坂本臣等之祖根臣遣大日下王
 之許令詔者汝命之妹若日下王欲婚大長谷王子
 故可貢爾大日下王四拜白之若疑有如此大命故
 不出外以置也是恐隨大命奉進然言以白事其思
 无禮即爲其妹之禮物令持押木之玉纒而貢獻根
 臣即盜取其禮物之玉纒讒大日下王曰大日下王
 者不受勅命曰己妹乎爲等族之下席而取横刀之
 手上而怒歎故天皇大怒殺大日下王而取持來其
 王之嫡妻長田大郎女爲皇后自此以後天皇坐神

狀而晝寢爾語其后曰汝有所思乎答曰被天皇之
 敦澤何有所思於是其太后之先子目弱王是年七
 歲是王當于其時而遊其殿下爾天皇不知其少王
 遊殿下以詔太后言吾恒有所思何者汝之子目弱
 王成人之時知吾殺其父王者還為有邪心乎於是
 所遊其殿下目弱王聞取此言便竊伺天皇之御寢
 取其傍大刀乃打斬其天皇之頸逃入都夫良意富
 美之家也天皇御年伍拾陸歲御陵在菅原之伏見
 岡也

○穴穗御子 は御諡を安康天皇と申されたり○穴穗宮 の穴穗は

山邊那なは也○伊呂弟 いろおと也相愛弟の義○大長谷王 大
 は殊にたへていふことば長谷の事前にありたり○坂本 は上野國
 碓氷郡坂本なり○根臣 と親愛より作るなり○大日下王 仁德帝
 皇子なり河内國日下郡也○妹 はたひのいらつめなるべし○四
 拜 れかみおれかゝむの義されは丁寧なる禮義をいふ王命の忝け
 あきを拜する也○言以白事 ことばもつてかり○おや 禮の無き
 義るは居なり座なりやはや行のゆえいみつゝみむをわやと云ふさ
 れは王命は膝行して進む古禮となれり○わやしる わやは禮也し
 ろはしるしと古人いへりさそわらすくひしるとはしめるなり天
 下をしると云はしめるなり原机上をしむる物より起り實はわやの
 机しろ物と云ふべきをわやしるといひたるなり後世商店にしるも
 のと云ふしめるものゝ義日本紀に机しろものと顯に見ゆ○おし木

之玉纒 おしはひそひのつめなりこれおそひ物の上にかさねる事は著也これおそひぎのたまかつらの意さて古人の衣服をみるにきぬのかゝぶりをかぶり此上にかねのうるはしきおしをさるなり此だいかかねにてうるはしきたまをつくるなりおしきはかゝぶりの上にきなものとぞこれ男女共に著すされど女神官等多くは著す後世皇后の冠はおしのたまかつらなりされは皺のかぶりたる等見たりこれらの濫觴と應神帝の冠らせられしかさてかつらをかみになぞらへてかざる也故にかみつらの義○あらことをよこになす たゝす(縦)よこす(横)也たゝすはたゝすなり○おのかいもや おのがいもよと同義○ひとしうがらの云云 しは形状言也ひとつと同じうがらうむかいも也がは君がのがなりうがらは同血統やら家族親族老等なり○したむしろ下席ならんやはといふ意○たかみけ はてかこみに

てつかなりとりは手にてとるしばりは何しばりと同くしめるなりしばりはしばると同くつめるなり○みむかひめ 夫に向て居る妻をいふ意○長田 は履仲皇女大和伊賀長田に住居す又名中帶姫然るに古事記に前に見ゆす紀にはありたりこれ全く前にもれおちたるならん茲に允恭皇女に長田とあるは別ありこれ攝津長田あり傳に論説の在るはわろし○神牀 くしびなるとを云ふ天皇職は万事神を祭か職なりされともいみて神牀にましまして皇后と共にみねましきこれらあるまぢきことにこそ○目弱王 天皇のおとしめて名けし名どてまゑ眞なりよわはよわきなり○きたきき きと靈にてくびかみかひのきの如きなりたといどの義くしびあるいどの稱また語をかへていへばくしびくみいつのあるものなり例令と死すなくなるなりされと死せばきたのなくなりてうつくしきに

反す○たたへ は片方をいふ○うち はことばをつよくそへ云ふ
言なり○都夫良意富美 は圓大臣にてつぶらおみえつぶらにてつ
びいろのおみなりおほみは大靈にておほえ大なりみはくしびなり
と天皇のはめにあづかる人に限りおほみといふさるに大臣と思ふ
はひなり後世大臣とかくは臣下の事にて大臣の義に限ず故を以て
こゝに於てもつぶら臣なり職官の大臣にあらず

爾大長谷王子。當時童男。即聞此事。以慷慨忿怒。乃
到其兄黑日子王之許。曰。人取天皇。爲那何。然其黑
日子王。不驚而。有怠緩之心。於是大長谷王。詈其兄。
言一爲天皇。一爲兄弟。何無恃心。聞殺其兄。不驚而
怠乎。即握其衿。控出。拔刀。打殺。亦到其兄白日子王。

而告狀如前。緩亦如黑日子王。即握其衿。以引率來。
到小治田堀穴。而隨立理者。至埋腰時。兩目走。拔而
死。亦與軍圍都夫良意美之家。爾興軍待戰。射出之
矢。如葦來散。於是大長谷王。以矛爲杖。臨其內。詔我
所相言之孃子者。若有此家乎。爾都夫良意美聞此
詔。命自參出。解所佩兵。而八度拜。白者。先日所問。賜
之女子。訶良比賣者。侍亦副五處之屯宅。以獻。所謂
屯宅者。今葦城之然。其正身。所以不參向者。自往古至今時。
五村苑人也。聞臣連隱於王宮。未聞王子隱於臣之家。是以思賤
奴意富美者。雖竭力戰。更無可勝。然恃己。入坐于隨

家之王子者。死而不棄。如此白而亦取其兵。還入以
 戰。爾力窮。矢盡。白其王子。僕者手悉傷。矢亦盡。今不
 得戰。如何。其王子答。詔然者。更無可爲。今殺吾。故以
 刀刺殺其王子。乃切己頸以死也。自茲以後。淡海之
 佐。佐紀山君之祖名。韓侂白。淡海之久多。綿之蚊屋
 野。多在猪鹿。其立足者。如荻原指舉角者。如枯樹。此
 時相率市邊之忍齒王。幸行淡海。到其野者。各異作
 假宮而宿。爾。明且未日出之時。忍齒王以平心隨乘
 御馬。到立大長谷。王假宮之傍。而詔其大長谷王子
 之御伴。人未寤。坐早可。白也。夜既曙。訖。可幸獵庭。乃

進馬出行。爾侍其大長谷王之御所。人等白。宇多
 物云。王子故。應慎。亦宜堅御身。即衣中服甲。取佩弓
 矢。乘馬出行。倏忽之間。自馬往。雙拔矢。射落其忍齒
 王。乃亦切其身。入於馬楯。與土等埋。於是市邊王之
 王子等。意富。祔王。袁祔王。柱。聞此亂。而逃去。故到山
 代。刈羽井。食御糧之時。面黥。老人來。奪其糧。爾其二
 王言。不惜糧。然汝者誰人。答曰。我者山代之猪甘也。
 故逃渡。玖須婆之河。至針間國。入其國。人名志自牟
 之家。隱身。役於馬甘。牛甘也。

○當時 かみは下よりさすことばにて下は唯今を云ふそれより古

へをかみと云ふ即ちそのときと同じ○童男　をこ小なりくは兒也
 即ちをこ也故にわかき人を云ふ稱にてをくななど云へり然してをく
 と男稱をこは女稱にて共にいまだとつきせざる年齢の頃也故を以
 てをこなといへる單に男稱をさべといへは女稱なりべは女にて斗邊
 と云ふ見ゆ是等を總て稚きもの、總稱と覺ゆ御名に童名とあると
 稚き名の總体を以て生涯たゝねたるもありたりされは長谷王子は
 末子なればたゝねてをくさど云ふさりなから此時は御年三十才に
 ましましていまた其形及髪のいひぶりなどのをくなにて御座け
 れと御名にいひたるもことわりなりけり○慷慨　うれたみはうれ
 いたみ也永と憂なりたみと庸也もとうれといふは心の動く事より
 いひてあそれと云ふと回くまたよろこぶうれふるなどは同様に動
 くもの也○兄黒日子　いろせのいろと親愛也せと兄也くろのくは

いく也ろはいろにて親愛也ひこは男の美稱也是等と親愛よりみな
 に負せりとぞ○とれ　を命を取る事也○おはらか　はおふらか也
 三音を五音に轉じたる也らかは平らかのらか也この意はおふよふ
 におもほせりとぞ○のる　はのゝしる也原義は鳴なりこれ大音を
 發したるをあると云ふ○とらから　は御同母なり即ち同腹なり意
 ととらかいの義也はらはいろ也○たのむ　を原字にしてそれよ
 り進みて形状言となりたりたはいたにて甚の義也のむは泣也即ち
 かなしき聲を小音にてあすなりされはしんぎんする事也これより
 變して物を依頼するとまたあつらへることなどゝなりたるは後世
 の事也○すなはち　をそのはとまだそのときもなるなり○くび
 とくばみ也即えりにてこゝを衣のえりをいふ也○ひきいでゝ　は
 ひきいでさせての義にてその人をでさする也○白日子　しろのし

と清也ろといろにて親愛なり此御方はやはりのしろびこと申して山城國八鈞にましませしなり○ゐてぬいひいてくる也原ゐてまいの雄を以て物共をいざなふなり即ちをいしき所のゐなりゐるといへといへともつてゐる也されは後世の男々しきにあたりまたいざなふ一方にちれりをの二音に轉してゐとなりさりながらたけきたけいの意をもつなり○小治田 之大和國高市郡小治田なり○たちちがら 穴をほりてたちたまゝ雄略を以てうづみいれし也されはその雄をしてえりをつかみてなしたるにてこゝに於て雄のあらるゝものなり○團圓大臣之家 は此意美の彼に與したるものと見習されてかくかこまれたるならんか○意美 之おほみの約言也おほみは大靈おらん○かくみ はかこみの五音を三音に轉せるものなり○いづる といひだすなりいひいづる矢事○葦來 こ

れを本居宣長翁傳に葦盛の誤謬ならんといはれたるかこれ不當也師云わしはなと云方よろしからん矢を射るは葦の葉の如くなればしからん○みつね みは御なりつえそつくすえ也矛を杖につくは即ち戦をやすらふの情の見えしなり○のぞむ のぞこのす也体をのしてみる事後とほくみるとなれり即ちおよびこしにてみる也されは元体言なるか動きてのぞまんのだむのだみとなれりかいままにかいまみかいまむと云ふと同じき○八度 は禮の重き事にて普通神に敬するは四度の禮拜なりこれは特別に重じて八度も禮拜をさされたり○たゝかひ はたゝきあひと云義也○をかみ はをれかゝむの義即八度手をつく事○からひめ はえからひめ也即ちてりかゝやくひめ義を云ふからたまのからと同じ此からたまえ明玉なり○さもらへむ はさもらえせん義即ちさいそらの用にたゝせ

ましやうの意を有す○みやけ みと御なりやけは屋家なり即ち役所の義これ天皇田部を定め此田部の人々に御料の食物を耕作せしめて收獲したるものを田部の役所につみかく庫の看者等を後世にみやけの稱を下してみやけと稱す元は稻をつみかく所の役所あり而して部人より奉まつらざるときはいまだみやけとはいえず奉りて後みやけの号の出づるなりされは此五處の屯宅は都夫良の莊園也而して獻せし後屯宅となれり○苑人 は百姓也そは外也の野也即外にある野なりされと島也いねむきまめなどをまく所にていま此五村苑人の存せるものゝたてまつりしものとかゝれたり○むざね むは身ありさは眞なりねは根あり即身眞根也されは世に体の事を云ふなりといふ説われを別なり師云むざねは魂なり例はかみむざねをかむざねと云ふ故を以て鏡太刀をかみざねとするは心

のどゝまるなりさて魂といへは精心もむざねにて同一なりさるかむざねの体となれりとぞ○臣連等 は大なる臣下をいふ稱○やつこ と臣下なりやつは家より出づ○つくし はつくす也物のなくなるまでなす義にて必ず佐行四段のすとなすなり○たゝかひ 劍と劍と弓と弓と互にうちあをすをいふ○いのちしぬとも いのちつくとも同義也以上たゝかはぬ体裁をみたせり○いたで いたと甚也で手也人の手にてきすつけられたるありまた人にしかせられたるをいたでといふ○たゝかはじ たゝかはれじの義○しせよ としなせよ也○さししせ はさしころしかりまたさしてしなせまつりの義○自茲以下雄略紀に編入ありてしかるべきなれどみだれかはしさを以て撰者の前代にまわしたるなり○佐々紀山近江國がもう郡さゝきなり○山君 と山守をさしたる職掌より起

りたり○韓借 ふくろは物をいれてふくらかとなるものをいふ此
 兄弟に大和の借といふあり此人はからのよきものをもちたるを以
 てからぶくろと云ふか彼の天ひぼこの如き様なり○久多 近江
 地邊に在りしか今之山城になれり○綿之蚊屋野 くだとわたとは
 別處なり近江國愛智郡わたのかやぬなり○しゝ は猪鹿のみを限
 らずしゝと云ふおもに猪鹿の肉を食する故を以てしゝといふ原義
 は物の重なるものをしゝと云ふて肉の賞翫したればまつ肉の多き
 を以てしゝといふ○すゝき すゝはすらくゝの意かやおばな等の
 直にのびたすものをすぐと云ふ即ちすつとのびたす木なり○さゝ
 け さしあけたる也○からき はかれき也○かりみや かりはか
 る也ぎつとするを云ふ即ちろらかそそうにするなり○つとめて
 いつとめとき也これはつきりとみえる意まどろむは目のどろむ也

即ちまどろむをかけて翌朝を云ふ也○のらしめ そのらしなから
 なり即ちのらしたまゝの義奇からと長の語也○かりみやのへ か
 りのみやのかたはら也○かりには とかりば也かりと物を大なる
 聲をなしてあゝつける意也また五に轉んじてこると云ふさあたて
 あめゆけとしかることなりこれをかるともこるともいふされはい
 かるといふて嚴より出づるなり故にしかつておひたすをかるど云ふ
 がいけどり追捕することゝなれり○宇多豆 は譯するときは轉々
 反覆するなりうと大なりたてはたゝえる也原茶椀に水一ぱいをも
 るその水をたゝえといふそと上にかさねるを以てうたてと云ふい
 やかうへにと云故に轉々となれりたゝふ云はたゝえるなりされは
 かさねゝますなりうたねと本義なりされとみふんより増長して
 物言ふを以てうたてと云ふ○みそをもかため 御身を固むと甲を

さるありみい美稱也そはものをかさぬるよりきものとなれり而してそをそなり抑身によるをよろひと云ふよろひはより也此頃の甲は鉄なりこさねにわらず鉄を体の形になして釘をうちいたにておとするなりすべて太古は腹だけにおそふ也古言にかめのかとらと云ふ故にかはらの如きなり体に云へるなり○たちまち たちまち ちま也たしちまめのときをいふたちまわちなり○うまよりゆき はうまをもつてゆく也○うまふね 馬に食を與ふものなり舟と云ふは其形のはそくながき形をいふ○與土等 凡て王を葬るには高く山を築上て其中に埋奉ることありさるに此は地と同く低くきに埋ひなり○意富那王 意富大の義那は久米の意これ久米におとすればなりさて意富は大なれば袁と小なり故に兄弟になれり○山代苅羽井 は山城國綴喜郡かにばるなり○かれいひはほしひなり

古へと田舎に旅宿店などなきを以て他行に用ゐるは常の事なれり
 ○めさける老人 　こはかにきづつはけられてある人なり即ちつみのある人はみなかはにきづつけるなり支那にて面刑とあるは同きなりそれはすみをさしてそれかいつまでもあるなりめはおりめきりめのめにつくものにてめはみえ也而して總意をめささてある事にてめさける人と罪人なればはたらくものありとぞ○あかひ 　はぬのしゝをかひそだてゝおる人也懲役するが如き也ぬは豕也ぬは多く山に居るものなれど里にかひてふやす也○玖須婆 　河内國交野郡玖須婆なりこれとくそばと云と同じき○志自牟 　は志自牟造狭目也播磨國に志自牟郷あり此志自牟の地の庫役人のほそめなれとしぢむのはそめの家にかくるなり
 大長谷ハツセ若建命ワカタケノミコト坐長谷朝倉宮イハハツセノミヤ治天下也チテノカミ天皇オホミカド娶大日下王オホヒメノミコ之妹イモメ若日下部王ワカニシノミコ又娶都夫良意富美之女ツツノミコ

韓比賣生御子。白髮命。次妹若帶比賣命。故為白髮太子之御名代。定白髮部。又定長谷部舍人。又定河瀬舍人也。此時吳人參渡來。其吳人安置於吳原。故號其地謂吳原也。初大后坐日下之時。自日下之直越道。幸行河內。爾登山。上望國內者。有上堅魚作舍屋之家。天皇令問其家云。其上堅魚作舍者。誰家。答白志幾之大縣主家。爾天皇詔者。奴乎。己家。似天皇之御舍而造。即遣人令燒其家之時。其大縣主懼畏。稽首白。奴有者。隨奴不覺而過。作甚畏。故獻能美之御幣物。布繫白犬。著鈴而己。族名謂腰佩人。令取

犬繩以獻上。故令止其著火。即幸行其若日下部王。之許。賜入其犬。令詔是物者。今日得道之奇物。故都摩杼比之物云。而賜入也。於是若日下部王。令奏天皇。背日幸行之事。甚恐。故己直參上而仕奉。是以還上。坐於宮之時。行立其山之坂上。歌曰。久佐加辨能。許知能。夜麻登。多多美。許母。幣具理能。夜麻能。許知。碁知能。夜麻能。賀比爾。多知邪加由流。波毘呂久麻。加斯。母登爾波。伊久美陀氣。淤斐。須惠幣。爾波多斯。美陀氣。淤斐。伊久美陀氣。伊久美波泥。受。多斯爾波。韋泥。受。能。知。母。久。美。泥。牟。曾。能。淤。母。比。豆。麻。阿。波。禮。

も此名わり原義はかたうをの意にてこの約つとなり故にかつを
 と云これ肉をはしかためたるうを也されこいまいふ所のかつをふ
 しを然してかつををわけてやをつくれるいへと上古の製作にてか
 つをきを屋のむねのぐしにわけるそはむすぶなそのかゝりとなる
 ものがかつをなりこれと天皇の御殿に限りて製するもの也さるを
 しきのおはわたぬしのなしたり今世神社にぐしの上にあゝは後世のかつ
 をき也○しきのおはわかたぬし 河内國にてのしきにて大和のし
 きにわらずこれ地名なり大は小に對へたるたゝえ名にて古へ縣に
 大小わりけるか其大にあたるものか即ち大縣なりその所主の義なら
 んされと此名と役名にて姓氏にわらずあまつ彦根の苗裔たる事明
 なれと闕名せり○やつこ と臣の義こゝはやつこよと意也○御舎
 みと敬語にてわらかと在所にて天皇の御座のまします故にみわり

かといふなり○稽首 しのびに泣きて物を言ふか初なりこれ真心
 をあらとす言なり原義はによびの約めたかかのびとありまたのみ
 に轉じたるものにてなきつく語也しんぎんの義を有す○隨奴 は
 やつこのまゝで長くとゝの義をもちたり○不覺 さとすゝみとはと
 ひされとすゝみとひなり○ぬやじり めやと禮なりすべて禮物の
 案の上にてのるものをぬやじりと云ふ○いぬ は源いぬるうまひな
 どと同言にて即ぬと同くぬむる事なりさてぬよるのよと同くい
 ぬは里に住居して夜物なれば夜の役をさすされはいぬと云ひたる
 なり然して前も云し如くいはいぬる也ぬは主にて親愛也即夜主を
 いふその犬を飾り首を結びて鈴などをつけて美麗になしてそなへ
 たるなり○うから はうむからの義にて即ちうむかいろ也○腰佩
 人 はいまた詳ならず○さて茲にのみぬやじりにつきて二説あり

一説は御幣物と犬とを獻せし如き意にときまた一説は御幣物には
 犬をなしたりと云説あり我師のいえる、と前後の關係をみてよく
 卽座に意外の事なれば彼の持する犬を幣物となせる方穩當なりと
 いへり○すなはち はそのほゞ也○若日下部王 卽若日下王大日
 下王の妹也一名はたひのつらへめと申き初め日下といひしを百姓
 の部曲を此姫の後に立ちぬて御名代とて日下部を定めたまふより
 の名にて後世のいひなり此處はいまだ若日下王の後に立ちたまわ
 されは部の字無きとみるべし○たまひ は下にものをたまふ也い
 ると家の内にひきいる也これ敬語にわらず○えつる はぬたる也
 本居翁のつると訓れたるといかゝたると訓べし○めづらしきめ
 と目也つはうつくし也らしきと形容語也らしきらしくと活くされ
 と目にうつくしくらしく見ゆるなれば此犬はよきいぬとみえたり

古は少しく犬ありたれとまためづらしき也○つまどひ 初めて女
 のもとに通ふそのときのと必ず珍しきものを遣す古例あり今にて
 と卽ち結納也さてつまどひの物といひてたまひいれきされはその
 物をうけいれたる文のあるべき筈あれどその文と古例にて省略し
 たるあり○背日 すべて東に向ふものは卽ち日に向ふなりされど
 此處之日に背くなれば卽ち西に向て来るならん其地理と天皇は初
 瀬にあつてくらかりとほけにかゝると卽ち西行するに於て單に日
 に背は方角をさしたるのみ也○たゞ はたたちへの義也○宮 は
 大和國城上郡長谷朝倉宮をいふ○こちのやまと ちは方角をさす
 このかたをいふ○たゞみこも たゞみはたゞむてさす也座具に供
 するものともなりそのこもをたゞみて打幾重にもなして座すこも
 をたゞみこもといふ也こもの事前に見ゆ○へぐりのへは幾重にと

平群と両ながら兼ねて平群の枕詞にこちらのやまとたゝみこもとお
 けり○こちごちく こちらと日下山也こちらハ平群とこちこち
 をいふ○かひ はきあひ也山脈のゆきあひたる所をかひといふ甲
 斐國も同義にて山のゆきあひ也されは山のかひはゆきあひたる所間
 の意となりたりかひ山のかひも同言也○さかゆるは いさよひよ
 くさかひのびる義也○はびろくまかし へびろははびろの轉語五
 を一になしたるなりさてはは大の義にて大樹をまたほびろといへ
 りくまはこもり也くみとも云ふて茂る意也故にくまかしくまさゝ
 等のくまはまもり也されは大に茂るかしの意也○もとべ 乙山の
 もと山のすぞ山のふもとをいふ○いくみたげかひ いは五十にて
 大の義也くみはくまと同じくこもりなりされは前に比較して大な
 る茂てゐる竹なり○すゑべ 乙山のいたゝきをいふこれ山もとに

對して云ふすゑのかた也○たしみたけかひ いみしみだけ也甚茂
 竹の義いたゝ大となる意をももてり○いくみとねす 籠り寝ず也
 夫婦一つに交り寝るなり伊乙入るの義○たしに はたらしにの約
 也即ち十分ねすの義たしかといふも同義にてたしとたらし也かゝ
 嚴々也○のちもぐみねむ のちまわこもりねやうの義也○おもひ
 づま 我思ふ妻の義以上哥乙假字にて文字をかきて遣はしたるな
 らん必ずありし事これにて明らかなり

亦一時天皇遊行。到於美和河之時。河邊有洗衣童
 女。其容姿甚麗。天皇問其童女。汝者誰子。答曰。己名
 謂引田部赤猪子。爾令詔者。汝不嫁夫。今將喚而還
 坐於宮。故其赤猪子。仰待天皇之命。既經八十歲。於

是赤猪子以爲望命之間。已經多年。姿體瘦萎。更無
 所待。然非顯待情。不忍於悞而令持百取之。机代物
 參出貢獻。然天皇既忘先所命之事。問其赤猪子曰
 汝者誰老女。何由以參來。爾赤猪子答曰。其年其月。
 被天皇之命。仰待大命。至于今日。經八十歲。今容姿
 既耆。更無所恃。然顯白己志。以參出耳。於是天皇大
 驚。吾既忘先事。然汝守志待命。徒過盛年。是甚愛悲。
 心裏欲婚。憚其極老。不得成婚。而賜御歌。其歌曰。美
 母呂能。伊都加斯賀母登。加斯賀母登。由由斯伎加
 母。加志波良袁登賈。又歌曰。比氣多能。和加久流須

婆良。和加久閉爾。韋泥豆麻斯母能。於伊爾祁流加
 母。爾赤猪子之泣淚。悉濕其所服之丹。搯袖答其大
 御歌。而歌曰。美母呂爾。都久夜多麻加岐。都岐阿麻
 斯。多爾加母余良牟。加微能美夜比登。又歌曰。久佐
 迦延能。伊理延能。波知須。波那婆知須。微能佐加理
 毘登。登母志岐呂加母。爾多祿給其老女。以返遣也。
 故此四歌者。志都歌也。天皇幸行吉野宮之時。吉野
 川之濱。有童女。其形姿美麗。故婚是童女。而還坐於
 宮。後更亦幸行吉野之時。畱其童女之所。遇於其處
 立。大御吳床而坐。其御吳床。彈御琴。令爲儻其孃子。

爾因其孃子之好儻作御歌其歌曰阿具良韋能加
微能美豆母知比久許登爾麻比須流袁美那登許
余爾母加母。

○美和川　こは美和にきて美和川となれりその源は初瀬川より出
ていとの下流はみわ川也○引田部赤猪子　こはかたりつたへの
あやまりたるならんか元來他の例をもちて案するに某の女某と云
ふべきをその父の名を某といはずあるはこれ簡略になしたる也さ
て引田はみわの所の内にあり赤猪は必ず父の名にこそわれ故に己
れを赤猪子といひたる也子は女のしたしみていひたる辭也○と
つく　と後世三音をぐとにざるはわろし古言にちしとづくと二音
をにざるは例多かりきさてとはところにて男根女根を共にといへ

り女根をはとといふか如し猶委く云へる前に述べし如くとと所に
てしめてねくところをいふと心得べしつくはうしろつくなどいひ
てそこにあひつくあれと男根女根互に交接したることにもいふこ
れ艶ぢやくするもの也○あふき　とあめをむくをいふあは上をむ
くといふ事ふくはむくとの往來言にてあめをむくの意味をもてり
○八十歳　いやそとせ也十年をそといふて數多の年を経たるをい
やとせといふなり○こゝたく　こゝは嚴々としておるを云ふたゝ
甚をいふくは事也故に嚴々甚事の義也されは數年にありて代々甚
歳をいふこれ八十歳に對へていひたる也○やせかゝみを　やせか
みといひたるなり茲にかじける言ありかはかわくのかなり俗言に
云ふ所のばさゝ也故に茲のはやせてひかわきたる形を云ふ故に
女のみづみづしき形を失ひたる也けり○いぶせく　はおぼせくと

同くおぼおろしくの意ア行二四の轉語例令はうらめしをうらみし
 と云ふか如しすべて心のはれぬをおぼといふ○百取の百を數な
 りとりは一人まへの義されはこゝは百人まへのしろものをいふ○
 たれやしおみなはたれよそれおみなよ也しと助辭にてそれとなり
 たりおみなはワ行のをは少幼のどきのに用ゐるお行のおと老女の
 きに用ゐる大の義なり○なにすれぞとなにすればぞ也○かゝふり
 かしらにかゝくる也これかしらかかふるの意也これらはかを重ね
 てといへり○おどろくおと大なりどろくはといろくの約言也こ
 れむねのどきくするを云ふて大にどきくする義をしかいへり
 ○みさをみと眞也さをとわをひ也されは青きは青くして色のか
 わはぬ如き也(松栢等)をそれよりみさを物をやくにたがわぬを云
 ふこのみさをの言語と古言に移らず中古の言ならん○いとほし

といととしと同じ即ち甚愛也愛するはきのどくと云ふ言語になり
 たりされはよのさかりをすくしたをあいする也故を以て遂にきの
 どくになれり○おひぬるにはゝかりたまひておひたるにとと
 いかりたまひて也元はゝかるをひらけたものゝつぼまる形なりは
 ゝははゝと同じくこゝまるとの如き意也かるは四段に活きていふ
 かるといかるなどの如く物の重なるにて加へるなりされはつぼむ
 ことのかさなるなり例令をしらくものいゆきはゝかると云ふも人
 の前をといかると云ふもみち同意なり○みむろはみわのみむろ
 也引田部はみわの神人なればみわやまのみむろの枕詞にれけり○
 いつかしかもどいつと齋き也かしは神社にある木は大概いつか
 々といへれとこゝもいつかすと云ふ意也もとはみさ也故にいつか
 しかもといふ意○ゆゝしきといみくしきにていみはゝかる

也されはおきてはいかる義にて神の樹なる故に手をつけず○かし
はらをとめ かしはらの如きたとめなり○わかくるすばら はく
りの多くとえてゐる原をくるすといふくりをくると云ふと三二の
轉を奇せりすはそのぬ也古へと野をぬといへり家の外面にある野を
そのぬと云ふされは内面に對してそといふそのぬを約めてすと
なりたり故にくりそのばらといふなり○わかへに わかきかた也
へとすきさつたことをさす也わかかふをわかへと云ふと三四の
轉語なり○に はにてといふ義これわかき年齢にて也而してねて
あたましものをおひにけるかなにてふくめる也○けせる をさせ
るともいへりこれ二四の轉させるはきたまへるなり○にえ はに
也さればにそすりならん○つくやたまかき はいつくやたまか
きなりこれいみきよむるたまかきの義そといつきまつりて作りし

なりやとくちわひのやと云ふ唯つくたまかきをいふにてたまがき
と威靈のかき也○つきあまし といつきやまし也いつきあました
也即ちもちまあす也されとあますはしかする言也○た はたれな
りたぞと云ふたは本体にてたれともなれり○宮人 は自身をいふ
て宮人といへりされば此一首の大意は貞節を守り操をかへと含
蓄なしたるなり○日下 は河内國大鳥郡日下村なり今之和泉國に
屬せり○こなばちす は蓮花也元來蜂の巢の如き實なるに依りて
はちすと云ふかく花までもいふになれり○さかり は目をはなた
すみつめるを云ふさかるの三音をさかりの二音になす若女盛人は
うるはしきものなれば身の盛人といひしなり○ともしきろかも
はとみたりてゐるかまわの義也身のさかりひとのどみしくたりわ
たる也うらやむといへとうゑんにある言なりされとみしきこと

じやなわの意也○さはに さえ真也即ち大なる義ははは也故に真
大といふが如し○しつうた これ歌樂寮に於てしづかにうたふ調
子の名なり○吉野 は古へときちをえとよめり此處之應神帝以來
開けたりそれより天皇の離宮を作れりこのときまた作り給へりま
た此野之あきつのもいへり○還於宮 之朝倉長谷宮にかへり給
ふ也○おほみわぐら おほみは敬語なりわぐらわは足にてくらえ
だい也即ち足をかく所をいふされはこしをかけるだいなり此わぐ
らは足のあるぐら也今の倚子如きにてこれよりはいとひろし俗言
にあぐらをかくと云ふもこれらより出たるならん猶いふわしを置
き位する所也○みこと みは美稱なりことは大和琴なり元は聲
音のこうととなるより起りてことといひたるならん支那語にてき
んと云ふもその音のさんと鳴るときゝてとなへしならん吳音に於

てもこんどいへはまた音のこんどきゝたる也○まへる はまねる
にて人うれしひことあるときは身をふるひ立てまわりめぐりてな
す也その原義之喜悅に堪ぬずしてまふより起りたり○わぐらわの
かみのみてもち 足床に居る自身をさして云ひてそのかみの御手
をもちてと自己をうやまひたるなり○ひくことに はひくことに
ての義也○とこよにもかも のとこはそこと同や遠處をさす故に
死なすの長く生きてをれとの義也かもはかまわにて願詞になりて
また愛することばをももてり

即幸阿岐豆野而御獵之時天皇坐御吳床爾齋昨
御腕即蜻蛉來咋其齋而飛於是作御歌其歌曰美
延斯怒能袁牟漏賀多氣爾志斯布須登多禮曾意

富麻幣爾。麻袁須。夜須美斯志。和賀淤富岐美能。斯志麻都登。阿具良爾伊麻志。斯漏多閉能。蘇豆岐蘇那布。多古牟良爾。阿牟加岐都岐。曾能阿牟袁。阿岐豆波夜具比。加久能。碁登那爾。淤波牟登。蘇良美都。夜麻登能久爾。表阿岐豆志麻登布。故自其時。號其野。謂阿岐豆野也。又一時。天皇登幸葛城之山上。爾大猪出。即天皇以鳴鏑射其猪之時。其猪怒而。宇多岐依來。故天皇畏其宇多岐。登坐榛上。爾歌曰。夜須美斯志。和賀意富岐美能。阿蘇婆志斯。志斯能。夜美斯志能。宇多岐加斯古美。和賀爾宜能。煩理斯。阿理

袁能。波理能紀能延陀。又一時。天皇登幸葛城山之。時。百官人等。悉給著紅紐之青摺衣服。彼時有其自所向之山尾。登山。上。人。既等。天皇之鹵簿。亦其裝束之狀。及人。衆。相似。不傾。爾。天皇望令問曰。於茲倭國。除吾亦無王。今誰人如此。而行。即答曰。之狀亦如天皇之命。於是天皇大怒。而矢刺百官人等。悉矢刺爾。其人等亦皆矢刺。故天皇亦問曰。然告其名。爾各告名。而彈矢。於是答曰。吾先見問故。吾先為名告。吾者。雖惡事。而一言。雖善事。而一言。言離之神。葛城之一言。主之大神者也。天皇於是惶畏而白。恐我大神。有

宇都志意美者不覺白而大御刀及弓矢始而脫百
 官人等所服之衣服以拜獻爾其一言主大神手打
 受其捧物故天皇之還幸時其大神滿山末於長谷
 山口送奉故是一言主之大神者彼時所顯也。

○即 は天皇の吉野宮に幸し、そのはど也○阿岐豆野 天皇の幸
 まし、とさの名に非ずそのとさと既に吉野川の上の野とぞいひけ
 んのちあきつぬとはいひけるあり○御與床 はあげくらの意にて
 わしあるいす也今とことなり座するはどのひろきなりこれるま
 しまして御かりのさまをみそはされたり○蟲 そあぶといふ往來
 言也あそ羽おとなりむと虫也元義は虫をむとはひたるなり然して
 むはむらかたの意しは副詞にてうしのしの如しまたのみしらみの

みも同じさてこのむし羽おとをする虫おれとあむといひたるなり
 必ずいまのあぶにあらすいづれか詳ならず○御腕 は御は美稱な
 りたゝむきは腕もおれまからさるところをいふたは手たむはたと
 むきとかひなりかひの約きなり即ち手のたをみたる間をたゝむき
 とといひけりそはをれまかる所をいふて腕の字にあたる○蜻蛉
 とんぼをいふさて専ら秋に出る虫なれとあきと名づけたらづは副
 詞にていつのつもの如し○美延斯怒能 みよしのとなくすべてえし
 ぬといふと古言にてよしぬは後世いへりなるべく古言に訓べし○
 袁牟漏賀多氣爾 此地は吉野郡内にあるならん此郡といとひろき
 を以てなり日本紀におむらたけとありろらの一五の轉音なり今
 日にては紀の通りおむらといへり蓋し同所ならんいかにしても國
 栖庄あたりにあるなりたけとたかねの約言○志斯布須登 しゝは

原肉をいふ名なりしといふ言がしげくにて物の重り重りたるをしといふその如く肉の多く重なるどころ即ちこえたるを以てしといふいひける後世猪のみしといふべきことなし鹿も共にしといふべき也その猪鹿の隠れているを伏といふなり○多禮曾意富麻幣爾 誰天皇の御前に申上げしなり即ち軍臣のみちびき奉りて茲にいごませしなり○夜須美斯志和賀淤富岐美能 やすらかにしろしめす我大王のと自身をいひたるは古例なり○伊麻志伊は實は五十なりされと多く發語に用ゆるますとは異なり只ますと云ふに發語のそはりてわくらにますをいふなり○斯漏多門能しろとさせことわりてまさりてのあきをしろといふたへはすべて絹布の總名也されこは絹布とみなすべし語をかへていへばうるはしくくしびなるなり○蘇豆岐蘇那布 蘇之御衣なりすべて縫

上たる名にておその義何となれば重ねてきるなればそといひたりては手の通るところをいふきそふはさしなふにて敬語佐行四段に活きてさしなす意也さればきたまふといふか如しそのさしはけしといふと同玄なふと四段活にて爲すことであるなりとの意をもつ故にみそなふといふ言をみそなはずとも延言せしこれら天皇の自らのりたまへるにて古例なり○多古牟良爾 てこむらにてたはて也こはいか也むらはひらかる也即ち手の大にむらかりたるところ肉の中よりいひて腓をいふなり○加岐都岐 ちかへつこの意なりまたたきつこの意に見てもよろしされとこはかさつきてありにみてゆくべし○波夜具比 ちすみやかにくひたるなり○加久碁登那爾淤波牟登 かくのことくなにねむとにやあらんの意をもちたりこのところにやあらんの意を省けりこにて歌を切りて

見るべしさてかくのことく名に負ひてゐるはしることにてあきつは彼のとよあきつ島のあきつをもちてこゝによそへ且つ虫もあきつなれどかく名に負はんとにやあらんとのたまひたり○蘇良美都 これより添へたる言なりそらみつは彼の邇藝速見尊の故事をもてそらみつといへりまたやまどのくにどつゞけいへり而してあきづしまといひたるはあきつをほめたりさて紀に之あきづしまとふなかかたをおかんとうたひつゞけりされと此書に之みへず此意を含ませてみるべし即ち汝か名をあとにのこさんとのたまひたるなりあきづしまといふ稱號は神武帝のあきつのとなめせる如きを以てあきづしまといはれたるは全國をいへりそれと同くむろを倭と云ふ如く汝もかくいへるを汝の名を以て負せんとあり故にむろをあきつといふ所とは異りて吉野にあきつをおきたるなり○葛

城山は大和葛城上下二郡に跨る大山あり○猪 之をしいぬなり○鳴鏑射 かぶはかみらはいろ也即なりかみいろやなりさるを後世かぶと燕菜の如き形をかしたるを以てかぶといふはしひことなりこれはよくとほるやを云ふ名稱なり○怒 はいきこるなりたけてまゐるときはいきのたけるものなればなり○宇多岐依來 うはうなるうめくのうなりたきはつさと同じつく之口より音のはげしく出たすをいふ槍をつくへををつくなどみな同意なりまたうそをつくといふも口より出ずをいふ即ちうめきたる聲を出して來たるなり○榛 はりの木は今いふとんの木なり原染木に用ゐたればとがと云ひたりこのこゝろ紀とは異也合せてみるべし○阿蘇婆志斯 あはいや也そぶはそびにてすゝび也即ち心のいやすゝみにすゝむなり而もて敬していひたるものぞさてあそぶするは業を作なす

ものゝいひなるかこれは貴人の射賜なすことなり心のすゝみてな
 したまへばすべて貴人のあそぶことゝなれり故に俗言にそれをあ
 そばせといふか如し○夜美斯志 やんたしゝの義にてなやみしゝ
 の意なり○邇宜 こゝろのどこゝろのかへるをいふにげはにむ
 にてあとにかへるなりまた堅きものか柔かなるをいふ○阿理袁
 能 わりはあらと同じをは山尾にてたわみをいふすなちあらみ
 をの意なり○はりのきのえだの下に 紀にあせをと云ふありこれ
 我背であるど語が脱せるなり○百官人 つかさのつかはつかむの
 つかなりかさは物の上の意にて頭をいふ即ちたかき所にてつか
 むを役所と云ふそのつかさはつかかさの約言なりさてつかさの人
 の行ならはその従僕のまた随てゆくものなり○紅紐之青摺衣服
 わかそめはわかりそめたるひもなりこれを用ゐるは古への風俗に

て古例なりさて此物は肩のゆきのかどにつくるものにて常(ハレキ)
 に左につく(青摺のトキ)小忌(祭事)に右につくといへりその原未詳さ
 れどかくの如きことありしならん然して古は何のためにかかひも
 をつけたるにやといふに袖をまさわけてたすきになす具なりしか
 後世變して飾物となりいまはくでにおみていとみぢかりしとあを
 すりえやままゆを以て染め青色になす常衣トキの禮服なりしか後世は
 祭禮服となれりおみにつれおほみにおみとわ ○山尾 は山の半腹を
 いふ○既 にはことゝ也○つら は行列をいふ○裝束 よしな
 りよしと身にひきつくちりよしをのべてよそひといへり○望
 みやらしてはみわひたまひてなり○やまと 日本をいへり既に應
 神のときより全國をも一州をもいへりしはらくたねたりこゝに云
 ふてあるは全國をさしたるなり○矢刺 はやのはしをはさむなり

語をかへは弓のえつをつるのはめるなり○あをのらさね はのこ
 野ぬと同ぐ玉をぬともものともいへりみな美稱なりこゝも同じ
 く美稱なりすべていふといふはうるをしくいふことにて廣き言な
 りされはのるといふも尤美はしくいふをのるといふなりのりこと
 なのり等とみみにわかるやうにおほせられよと美はしくいふ類と
 同じ○雖惡事而一言雖善事而一言言離之神葛城之一言主大神 ま
 かえ物のまかるのまかにて直の反なり惡事禍死等をまかど云ふこ
 とゝゐるき事也されと惡事は人の忌事にてわざわひなり即ち私の
 一言でわるくあれといへはその物はわるくありまた私の善言なる
 一言あれば善くあるなりことさかのことは言也借字にて實は事也
 さかはさかるにて退き離れるなりされはわるきことの事のさかり
 てよきになりまたよき事のさかきてあしきになるありそのことさ

かはけをかに轉せしにてことさけらせのかみなり主は敬語にてう
 しと同じ神代紀にみえし事代主神ありすべくゝるに善惡共に我の
 一言でよくもなりわるくもなるなりこれにて一言主といひたり此
 神あらはれましてより自らみしわざを以てみなをたへたるなり
 ○宇都志意美 うつしきかみをすゑたるにてうつしおみとはひた
 りうつみはうつしきおほみの約言なり○覺 さとるはすゝみとる
 なり即ちすみやかにさとるをいふるを形状言なりと○をろがみ
 はをれかゝみなり○手打 とからずうれしき事あるときはいまに
 てもてをうつなりそれより起りて神前に於て手をうつことのはじ
 まりたり○滿山來 本居翁之降山來の誤なりといへれたりさのみ
 かへずともよからん眞淵翁順山未といはれたり我師も眞淵翁と同
 説にて山のすゑよりならでは意をあさずとさて天皇は平地に向て

かへりたまひ一言主神は山のみねつゞきより長谷山口にまで天皇
を送り奉りきと○顯 乙本居翁之一言主神の御身のあらはれたる
をいふととかれたり師のいふさにあらずこれと御名のあらはれた
りその御身体のあらえられたるを勿論なりされど一言神の御名の顯
れたる方おやたやかなりして御身体のあらこるゝとすれば神の形
にわらずして天皇の形にてありしならんかく顯名たる例他にもみ
えたり

又天皇婚九邇之佐都紀臣之女袁杼比賣幸行于
春日之時媛女逢道即見幸行而逃隱岡邊故作御
歌其御歌曰表登賣能伊加久流袁加袁和那賀岐
母伊本知母賀母須岐婆奴流母能故號其岡謂金

鈕岡也又天皇坐長谷之百枝槻下爲豐樂之時伊
勢國之三重采女指舉大御蓋以獻爾其百枝槻葉
落浮於大御蓋其采女不知落葉浮於蓋猶獻大御
酒天皇看行其浮蓋之葉打伏其采女以刀刺充其
頸將斬之時其采女白天皇曰莫殺吾身有應白事
即歌曰麻岐牟久能比志呂乃美夜波阿佐比能比
傳流美夜由布比能比賀氣流美夜多氣能泥能泥
陀流美夜許能泥能泥婆布美夜夜本爾余志伊岐
豆岐能美夜麻紀佐久比能美加度爾比那閉夜爾
淤斐陀豆流毛毛陀流都紀賀延波本都延波阿米

袁^チ淤^ハ幣^ヘ理^リ那^ナ加^カ都^ツ延^エ波^ハ阿^ア豆^ヅ麻^マ袁^チ淤^ハ幣^ヘ理^リ志^シ豆^ヅ延^エ波^ハ
 比^ヒ那^ナ袁^チ淤^ハ幣^ヘ理^リ本^ホ都^ツ延^エ能^ノ延^エ能^ノ宇^ウ良^ラ婆^バ波^ハ那^ナ加^カ都^ツ延^エ
 爾^ニ淤^ハ知^チ布^フ良^ラ婆^バ閉^ヘ那^ナ加^カ都^ツ延^エ能^ノ延^エ能^ノ宇^ウ良^ラ婆^バ波^ハ斯^シ毛^モ
 都^ツ延^エ爾^ニ淤^ハ知^チ布^フ良^ラ婆^バ閉^ヘ斯^シ豆^ヅ延^エ能^ノ延^エ能^ノ宇^ウ良^ラ婆^バ波^ハ阿^ア
 理^リ岐^キ奴^ヌ能^ノ美^ミ幣^ヘ能^ノ古^コ賀^ガ佐^サ佐^サ賀^ガ世^セ流^ル美^ミ豆^ヅ多^タ麻^マ宇^ウ岐^キ
 爾^ニ宇^ウ岐^キ志^シ阿^ア夫^フ良^ラ淤^ハ知^チ那^ナ豆^ヅ佐^サ比^ヒ美^ミ那^ナ許^コ袁^チ呂^ロ許^コ袁^チ
 呂^ロ爾^ニ許^コ斯^シ母^モ阿^ア夜^ヤ爾^ニ加^カ志^シ古^コ志^シ多^タ加^カ比^ヒ加^カ流^ル比^ヒ能^ノ美^ミ
 古^コ許^コ登^ト能^ノ加^カ多^タ理^リ碁^ゴ登^ト母^モ許^コ袁^チ婆^バ故^コ獻^レ此^レ歌^チ者^ハ赦^シ其^レ
 罪^チ也[。]

○丸通 は添上郡春日のわになり○佐都紀 はさちきみなり○袁

杼比賣 本居翁のをとといはるゝはわるし師云ふ清音によむべし
 をとひめ也わかきうつくしきひめの義○婚 乙女の所にゆきてよ
 ぶより起りよぶの延言とよばふ也○逢 乙あへるかの意なり逢へ
 る女かの意○をかひ はをかべともいふ二四の轉語○よみ はよ
 むと同く四段言にて古言よみと活くなり○伊加久流 伊は發語ま
 た五十に當るかくるは隠なり○加那須岐總てすきと木金にて作るこゝ
 は金のすきなり○伊本知母賀母 いはといをつなり五百箇をいふ
 がもえがまわなり故に金すきを五百本はとこしきものじやまわな
 り○婆奴流 はばらくゝよするなりはらくゝと同じこゝはすきて
 ばらくゝにする事にてすきを以てはねあげる也ものはものをの意
 これ天皇の御製にて臣下のなかゝよむべきにしもあらず○金鉏
 岡 と未詳いづれかすかのあたりならんかし○百枝槻 樹枝數の

多き大樹をも、えといふつきはいつき也いつのきなれば也○豊樂
 とよと美稱あかりは酒のみてわかかるをいふ必すとよわかり
 をさけのむ事のみ用ゐるにわらずさて古へは大事をなすときの
 前後になすなり此の大事といふは神をまつるなり○采女　とうね
 べとよみ必すうねべとよむ事と後世なり古言必すうねめとよむな
 りうねめうねべ往來にて後世うねべのみよむ上古は男女共に名わ
 りて男をうねめ女はうねめべなり中古は男無くなりて只女のみう
 ねべといひたりうねべはうなげの約言にてわなげ也わなげとわな
 しわけの事たすきをかけてはたらきたれはなり○さかつき　さけ
 つき也かけを一音かに轉せしなりつきはいつきうつとなり即ちう
 るとしきうつはの意酒をうるはしきうつはにくみたれはさかつき
 と云ふ也古とさけを奉るとき酒を盃につきて持出(目八)奉るなり今

は空盃にて人に指出すなりこのとき盃につぎ高くさゝけてきたる
 なり○みそなふ　はみしなふ也即ちみしなす意みたまひなすの義
 ○麻岐牟久能　は葛上郡纏向なり○比志呂乃美夜　は景行帝の宮
 なりこれより以下の哥語は古語歌をうたひたるにてそれに今度の
 入用の所を加へて座興になす此哥はあまかたりにせしあり○阿佐
 比　は打晴れて東の明なればあさひの日照の宮といひたり○比賀
 氣流　はひかけいるの約言夕方になれば日のいるをいふ○多氣能
 泥能　能と如きの意ねは根本ありそのねはなへの約言うちなへた
 るなりそれより根本となれり○泥陀流　と根の十分足る云ふにて
 うでかんみやをいふなり○泥婆布　ねはふみやにて宮造のうでか
 んみやをいふなり○夜本爾余志　いやをにの義余と咏嘆志は咏嘆
 それなりいやをによそれの意なり○伊岐豆岐能　伊と發語五十に

わたるきつきは古へは杵を以てつきたるなりきと杵也その杵を以てつきて土をかたむるなりこれら事實より云ひしなり○麻紀佐久これより殿のつくりを云ふまきは眞木なりさくと直に裂るをいふこれ斧のあたりてまからずにはけるを云ふ名なり木の木目のあらはるゝ様にありたり古へは一本にかぎりてかまきといはずこゝはまきさくひとかゝるなりをよめ^の心意を述ふ○爾那閉夜 とい古歌になし新にはさめるなり○もゝたる もゝと大なりまるは足なり即ち十分に茂る義○本都延 秀たる枝なり高き枝をいふ○阿豆麻 は東國の名なりすべてひなは廣きをいふて内國うちくにの外をみなひなど云ふ東國も内國にあらず田舎なりその大樹なる所以を云ふなり○布良婆閉 ふれへなりへは原語なり下二段にありしさをまたいまの人は下二段にいふはわろきありされとえうのえとこううく

るうくれどか行下二段にありこれ原語のつゝまりたればなりおちふれへているなり○阿理岐奴 ちあかりきぬなり玉を衣の上につくるなり玉をくひつくる意これらは古歌を取らず新にとさめにわりきぬの如くうつくしき子にかゝるなり○佐々賀世流 さゝけたまひてある意さしあける事なりさゝ佐行四段にて敬語これとよのあかりにてもよほしたりしときの盃をさゝけしあり○美豆多麻宇岐爾 みいつたまうきなりうきと盃なりうは飲む聲をいふきとうつをいふたまは美稱なり○宇岐志阿夫良 うきしあぶらの如くの意なり○那豆佐比 なつみそふ也なつは親愛詞そふは物のそとりてはなれざる事なり盃に浮ぶをいふ○美那許袁呂 みのこほろど同じ彼の神代の潮こほろくにかきあす故事ありこれをとどれり(このまたとたのま)そのこゝろと水のなる聲なりさればが

ぶくのむをいふて下にきこしめさへのあるへきを省きたるあら
ん祝詞にかゝのむとあるもがぶがぶのむ事意なり○これをも は
これそれまわの意○これをば はこれをばの意なり○ひどのかたり
ごどもこをばとある言は人の言をかたりつたへたるときにこれを
いふなり古歌いづれも是をいへりさて此歌はあまかたり歌にてあ
まは美稱なりかたりを或人かみかたりといはれたるをわろしこれ
あまかたりうたをいふなり

爾大后歌其歌曰夜麻登能許能多氣知爾古陀加
流伊知能都加佐爾比那閉夜爾於斐陀豆流波毘
呂由都麻都婆岐曾賀波能比呂理伊麻志曾能波
那能豆理伊麻須多加比加流比能美古爾登余美

岐多豆麻都良勢許登能加多理碁登母許袁婆即
天皇歌曰毛毛志紀能於富美夜比登波宇豆良登
理比禮登理加氣豆麻那婆志良袁由岐阿閉爾波
須受米宇受須麻理韋豆祁布母加母佐加美豆久
良斯多加比加流比能美夜比登許登能加多理碁
登母許袁婆此三歌者天語歌也故於此豐樂譽其
三重采女而給多祿也。是豐樂之日亦春日之袁杼
比賣獻大御酒之時。天皇歌曰美那曾曾久於美能
袁登賣本院理登良須母本院理斗理加多久斗良
勢斯多賀多久夜賀多久斗良勢本院理斗良須古。

此者宇岐歌也。爾袁杼比賣獻歌。其歌曰。夜須美斯志。和賀淤富岐美能。阿佐斗爾波。伊余理陀多志。由布斗爾波。伊余理陀多須。和岐豆紀賀斯多能。伊多爾母賀。阿世袁。此者志都歌也。天皇御年壹佰貳拾肆歲。御陵在河内之多治比高鷗也。

○大后歌 も例のあまかたうたにて古歌をよみたるなり○倭は和州の倭をいふ○許能多氣知爾 この之指したる言也たけちはたかさいちの意にしてたかさは美稱ちはいちのいを省きたるもさていちといふと廣き所をいふにていは五十にて大とも意をなせりちは地にてこのいちといへは大なる所といふて諸ならんされ人のあつまるにひろきよきところなれといふなり此地は大和の國

中にて最もよきところなれと名づけしなるべし而してまた此地は神武帝より都となし玉ひたれども此歌を按するに應神帝比のうたをとりだしてよみたる如くみゆ○古陀加流 こだかくあるの約言これをこたかあるともまたこだかかるともまたこだかるともいふなりこは少し高きところをいふ故に廣場の少したかきをいふ稱也○都加佐 つは所也かさは頭の意也つかさくのかさと同じされは一ばんたかさ所をいふてそれより官司をいふに至れり○爾比那開夜 と古歌に無き語にて敏智を以てこゝにいれたるなりされは本歌といへはいちのつかさにかひたてるとありしならん○波毘呂 はは大なる意はほと同じくはひろなりされは大廣の義○由都麻部婆岐 いはつまつばさ也此名義之枝の茂りより起けれるかまは真也つばさはつばのする木をいふつばはつびと同じくものをうつ

具なればつばきといふなりこれ木刀などに現に用ゐたり○そかば
 それがはをいふ○ひろりひろりの約にてゆたかにいますさ
 まをよみしなり○てりいますはそのみかたちをえなるゝとへて
 よみたるなり○たてまつらせは敬語にてたてまつりたまへとい
 ふ意なり○ことのかたりこともをばは例の古歌を傳いふ天語
 なり○もゝしきはもゝいしきにて禁中をいふこの歌もあまかた
 りうたなり○さて古事記傳にて詳ならず大宮人ゝひろく男女ども
 にいひたるなり○うづらは鳥なり古人もいへり此名は聲より名
 けしとさて聲は古人とけんくどきけりいまはらなんくどなく
 をきけりらは敬語親愛語なり而して此義はうづらとりの如く意な
 り何となれと宣長翁契沖翁兩大人共に此鳥のぬりのまわりに白さ
 んあることをいへりこゝを以てうづらの如くひとをとりかこみた

るさまをいふ○ひれと物をとらふために古へつけたりさるを後
 世の一のかざりとなれり○まなばしらと記傳に詳ならずれども
 せきれいの類ならんといへりさにわらず師の云それは語の委細を
 知らずにしていひしありさてまなばは眞なりなは魚なりまなかつ
 をといふに同類ありばしはほしなりらと親愛なりされはとくゝり
 ていふと鳥中に於て魚をとる一種の鳥にて必ず此一種に限らず他
 に多く魚をとるわれはすべて魚をとるところの鳥をまなばしら
 といひたるあらんされと後世に至りてはかえせみみさこ等をかま
 なはらしといふ新撰字鏡にも右の二をまなばしらといへり師云い
 まかりにみさこをまなばしらと定めてとかん○をゆきあへをを
 をいとおなじくたわむの意されはたわみゆきあふをいふ故にまな
 ばしらの如く身体をすんでゆく(花さきをゝのををと同じき)これ

酒を奉るさまを云ふあへそわとせ也をくゆきあわせの義にてから
 たをこゝめてゆきあはせありこれら大宮人のならびてあるそれに
 もきわひたるさまをいふいかにたどへたるといふに此鳥も下をし
 てこしをかゝめばなぞらへしなり○たにそ 田所にて田甫ならん
 平には庭は場所をいふされは丹波といふと同じき○うすすまり
 うすはおすと同じおしとも同じさればれしつまりと云ふ義唯うと
 おと轉すおこりと同じくすまると一所にあまつる事にてしまると
 同じこゝにそすゝめの如く多くあつまりいるなり○けふもかも
 はけふそれかまわなりもの二字ともに咏歎のモなり○さかみつ
 くらし 先哲此語詳ならずといへり古歌にのべゆかすさかむす
 といふはさけにしたると云事にて此意いかならんすべて酒をのま
 んとして却てのまるなりこゝはみつきと同く酒をみいつのまんと

云ふ事にてのみて祝ふをいふ○さかほかひ 七さかいはひになり
 かははさかほそひをするそうだといふ事○ことのかたりことも
 こははといふこれ古歌のまゝをそれり宣長翁あまこと訓たれどさ
 にわらず師云わまかたりうたと訓むべしかたるといふは古歌をか
 たりつたふる義にて京に職ありて天語連といふあると古をかたり
 てきかするものなりけんそれはよくかたりたれば連を玉ひたり
 天をそへたるは美稱なり○春日のをきひめ 七天皇の御寵愛の婦
 人なり○みなそゝく 七枕詞也みなそ水なりそゝくはすゝくと同
 じ水中をすゝみゆくなりそらそゝくとあると同じこれうにかゝる
 枕詞○おみの のおはうかの約なり傳にいふ通りおみと圓大臣の
 大臣のれみともおほみともいふそのおみのむすめなり○はたりと
 らすも はと大なりたりと樽なり三の音に轉せしなりたりはとつ

くりなり酒を盃につきたらすを以てたるといひけりとらするはど
 るなり○とらすも はどるまわなり○かたくとらせ せしつかり
 ととれと云ふ○したかたく のしたは下なり大樽の下をしつかり
 ととれと云ふ意○やかたくとらせ といやかたくとれと云ふ○は
 だりとらすこ 大樽をとるこよしつかりとれと云ふ意○うさうた
 うきは飲む器ありされは盃をいふ故に盃を出して酒をのむとき
 にうたふなれば後をめぐらしてこゝにうさうたとかいれり○わか
 れはさみ の朝廷は雄略帝をさしたまひたるなり○あさ戸 は朝
 戸ありあさをあさといへとあさと同じ意○いよりたゝし いと發
 語五十の意よりたゝしはよりたつの延言よりたちたまふをいふ○
 わきづさか はわきをつくものにて即ちわきのしたをつくなりつ
 くとよりかゝる事いまいふてすりのやうなもののあるなり右にま

れ左にまれ自由うわきをつくによきものなり傳にはきやうそくと
 いひてとかれたるはわろし元來わきつきよりえきやうそくの由で
 來たるものにてこれへと座することのでくべきなりされはこれと
 大なるものにていまいふ倚子の如き縁にひぢつきの有様にみうけ
 たり○わきつきかしたのいたにもが わきつきかと前にときたり
 いまいふところの倚子の下の板になりてもなりたいされは身にも
 かくあるであらふと己れを卑下していひたるなりいたにもがまわ
 の意○あせを せせといふは男女共に呼ぶ美稱にてあせといへは
 愛したる意をもつ日本武尊をあせといひたることありこれも愛し
 たるありをはよなり○しづうた 雅樂寮にて調子をひくゝしづか
 にうたふ歌をいふて彼寮につたへたりとか○河内之多治比高鷗
 と多治比郡高鷗原にあるとぞ

白髮大倭根子命。坐伊波禮之甕栗宮。治天下也。此
 天皇無皇后。亦無御子。故御名代定白髮部。故天皇
 崩後。無可治天下之王也。於是問日繼所知之王也。
 市邊忍齒別王之妹。忍海郎女。亦名飯豐王。坐葛城
 忍海之高木角刺宮也。爾山部連小楯。任針間國之
 宰時。到其國之人民名志自牟之新室樂。於是盛樂。
 酒酣。以次第皆舞。故燒火少子二口。居竈傍。令舞其
 少子等。爾其一少子曰。汝兄先舞。其兄亦曰。汝弟先
 舞。如此相讓之時。其會人等。唉其相讓之狀。爾遂兄
 舞。訖次弟將舞時。為詠曰。物部之我夫子之取佩。於

大刀之手上。丹畫著其緒者。戴赤幡立赤幡。見者五
 十隱山三尾之竹矣。〔本〕訶岐。末押靡魚。如調八
 絃琴。所治賜天下。伊邪本和氣天皇之御子。市邊之
 押齒王之奴。未爾。即小楯連。聞驚而自床隨轉。而追
 出其室人等。其二柱王子。坐左右膝上。泣悲而集人
 民。作假宮。坐置其假宮。而貢上驛使。於是其姨飯豐
 王。聞歡而令上於宮。故將治天下之間。平羣臣之祖。
 名志毘臣。立于歌垣。取其袁祢命。將婚之。美人手。其
 孃子者。菟田首等之女。名大魚也。爾袁祢命亦立歌
 垣。於是志毘臣歌曰。意富美夜能。袁登都波多傳。須

美加多夫祁理。如此歌而乞其歌末之時。袁祁命歌曰。意富多久美。袁遲那美許曾。須美加多夫祁禮。爾志毘臣亦歌曰。意富岐美能。許許呂袁由良美。淤美能古能。夜幣能斯婆加岐。伊理多多受阿理。於是王子亦歌曰。斯本勢能。那袁理袁美禮婆。阿蘇毘久流。志毘賀波多傳。爾都麻多豆理美由。爾志毘臣愈忿歌曰。意富岐美能。美古能志婆加岐。夜布士麻理。斯麻理母登本斯。岐禮牟志婆加岐。夜氣牟志婆加岐。爾王子亦歌曰。意布袁余志。斯毘都久阿麻余。斯賀阿禮婆。宇良胡本斯。祁牟志毘都久志毘。如此歌而。

圖明各退。明旦之時。意富祁命袁祁命二柱議云。凡朝廷人等者。且參赴於朝廷。晝集於志毘門。亦今者志毘亦寢。亦其門無人。故非今者。難可謀。即興軍圍志毘。臣之家。乃殺也。於是二柱王子等。各相讓天下。意富祁命讓其弟袁祁命曰。住於針間。志自牟家時。汝命不顯名者。更非臨天下之君。是既為汝命之功。故吾雖兄。猶汝命先治天下。而堅讓。故不得辭。而袁祁命先治天下也。

○白髮大倭根子命 天皇の生れながら白さかみにましましたれはこそ白髪と名づけけれ大倭大は美稱倭は和州にて倭に御座まし

ましたれとかくあり日本といふにわらず根子と天皇の天下を知しめししときの尊稱なりまた若倭根子ともいへり後に諡して清寧天皇と申されき○瓊栗 是高市郡みかくりとあり○この文面と書紀と異にしてあれど彼れは彼れ此れと此にていましばらく記の本のまゝとかん○日繼所知之王 是天皇崩したまひたれど御子ましまさず故を以て天皇となるべき王をたづねたるなり○忍海郎女 また青海ともあり青は大あり忍は大なりされは二つとも同じこれ履仲天皇の皇女にましませり○いひとよ 是鳥なりいまいふみづくならん此のころは鳥魚を名とする習慣にてその風俗に依てつけられたり○忍海之高木角刺 忍海は大和國忍海郡あり高木は高き所なり宇陀乃田賀木爾斯藤和奈波流と有る如くそのたかさ所と同類なり○山部連小楯 後の事をこゝに及ぼして書かけり此

ときは久米部小楯なり顯宗帝を見顯としたるいさほに依山を守る部となし次きて連を給ひて山部連となりたるなり○國之宰 屯倉の米を集る役人にて臨行に京を發し役終りたれとまた京に還へるなり國に留ることなしなみの國の政を執行するものと別あり○志自牟 是しむ郡屯倉役人なるはそめをいふ○新室 室とぬところなり古へは家を建築せしよりも床寢所を設くる方を祝ひたるとみえてこゝも新室を造りたるを賀するなり○うたけ とうちあけなりこれ釋をうちあけてはやすせばかくいふ○ついで 是宣長翁の訓まれたるはわろし師云つきてと訓むべしつきてはつきいであればあり上座より漸々下座に及ぼし舞ふなり○焼火少子 これくらしもつかぬ奴婢なり(座くらし)さてひたきわらはといふは古へは尤も火を大切になし清淨になせはあのづらから不淨ものはいみて

用ぬずされば小兒は罪もなきものとみなしてひたきに小兒を用ゐしなり大人は不淨且罪ありたりとてとらず故に多し小兒を仕ふされとまた老人を仕ふ事ありたり此とき二子のひたきわらと云へと云は壯年近き年なりけりわらはといふとばらと云事にて小兒のさんばらかみといひて髪のはらとよりわらとといひたるなり○かまへ これかまとこにてかまのゐるところのそばをいふそのかまはくもるといふ意なり火をこめてつかふを以てかまといふ後世いふなべかまといふかまと意同じきにや○なせまづまひなせのなと親愛なりせは兄なりしたしきところの兄まづまひたまへといふ○ゆづる ゆは物をやる事つたは物をする事にて佐用形状言なりされと相互に言をやりなす義此ゆづりを延べてゆづらふともいふ○詠 兄命先つ舞終りて弟命舞んとて途中にて隣を長々に

いひたるをながめとといふされは舞のときにはうをういといと長くすると同じく長くかたりたるなり○ものふ 物をなせる事にて物の形をなせるをいふなりのふは自然になつてあるをいふにてすべて物のととのふにてあるさまをいふ一例になしてゐるは後世のいひさまありされと此處志卒自を單に指してものふのわがせといひたるなり○わがせ 男よりも女を指し女よりも男をさした主をも云ふこれを按ずるに主人を指したるならん○たかみ とつかみにてつかのどころをいふ○にかきつけ 母は土にて青色赤色などありされと母といへは赤色土を多くいへり故を以て其の赤色の土をかきつけいろどりたるなり○赤幡立 と劔の緒にて赤き幡をたてゝ腰につけしあり○赤幡立見者 宣長翁はわかたれていと訓れたりさにあらず師云わかたをたちと訓べし

とさればわかたをたちてみれその意なりこれ詞の序にきたるなり而して立見ればにてたちてみわたすの義○山三尾之竹 本居翁いかくるやまのみをのどよまれたれとさにあらず師云いこもるやまのみをのたけと訓べしといは五十の意にて發語也こもるとかきこもるなりみをは山のたをよなる所をいふそのかきこもつている山のたをよなる所に竹のはえているさまをよみしなり○本訶岐本居翁のいはれたる如く本の字あるべしさてもとをかきかりすゑとおしきびかすさまなればこれ竹をたしなびかす如く天下の人も治まり泰平なるをいふ○八絃琴 いやをことにていくつもある緒の琴なり此琴を弾き鳴らす如く天下のどよのはりたるをいふ○やつこ と自身を卑下していひたるなり○しびなく如くさやくに○床 ゆはいむ也かた所なりすべて人の住居するところといひま

よむものなればゆかといふなり○ませまつり はまさせまつりて也不意のことなれば何處にれきたてまつるべきところなけれたまづひぎにおほきたてまつるならん○なきかきしむ はわまりうれしさのかぎりにてなきかなしむなり○かりみや かりは輕にてかりかるかなど四段活よなる○とゆまづかひ はやうまつかひを奉京しなり○姨 と云ふに或人みわねと云へるをわろからん師云必ずみをばなり何となれば天皇ともなりて直に天下を知しめすとみをばによれえなざるわけなりまた孫にては勿論の事さるをみわねといふと少しあたらす○志毘臣 平群真鳥子鮪なり魚名を以て人名とせりしびまぐろなどある如きしびなり○うたかき は昔よりある風俗なり夏になりては大路に出てうたふなりこれをうたかいひするといふかゝひはがやく也被詞にかゝのひまた萬葉集二

につくばねのかへとあるなどもみながやくなりさてかひを
約めてかきと云ふされはみかきと云ふものあるといかなるもの
ぞこれいまの益をとり様のものなり○菟田首等 の等は多くのと
きまた一人のときにも用ゐる此詞は親愛の辭にて略さても文意は
さこゆるなりうたのおびどの女の如し○大魚 はおほうをなり○
かく志毘臣と袁祁王と贈答あるは元袁祁王のひたきわらゑにませ
しなればそれを思て輕忽にとりあつかひたるなり○おほみや
天皇の宮をさしたるなり○おとつはたで おちつはたでにてはた
でとはたつべなり即ち端邊なりつべの約でなればなりそのおちつ
べたつべは一方のかたむけりたるをいふにてかみをみくびていへ
りこれあるまじきことになん○すみかたむけり 即ち一方の隅の傾
きたるをいひたるにて此みやも損せしもやあらんの意なり○おほ

たくみ おほは美稱これ朝廷につかえるもののくたみを大匠と
いふすべてたくみと云はかぢやにまれ大工にまれいふ名稱にてた
と手なりくみはくすひ也またくしみまたくみともいふ○をぢあみ
こそ おと雄ありされは雄威稜のなきをいふにて柔弱なり故にそ
のくみのつたなきゆゑこそ家の隅かたむけりけれ我にこれにかか
わらすといふなり○こゝろをゆらに 心のとやくあいるにて心
の寛るさの義○淤美能古 志毘命自身をさす○此歌は我勢あ
れども大王の勢まさぬを云ひたるなり○しほせの 潮の瀬か風に
ふかると勢のつく通り勢つきてくる意をよめり○あをり となみ
のおほる事波の高く立ちておほるなり○つまたてりみゆ つまた
てりそれかみゆるなりそは鮪の端の邊につまたてりといふて女の
はなしになしてつめるなり○やふじまり いやふしまり也ふと結

なり木の葉を以てかきねとなしそれをいくゑもしめるなれといや
 ふといふ〇しまりもどはし といやしまり廻もどはしのかきをいふ〇きれん
 しばかきやけんしばかき さればさられんしばかきなりやこうど
 すれとやけんしばかきといふあり〇大魚よし 大魚よそれと女を
 さしたりしびと魚と人とを兼ねたる義にて魚のしびとはこを以て
 あきとのしたをつくなり万葉集二にもみえたりそれとなく鮪を誅
 しつる臣などにその意を含む〇しがわれば 汝か荒れやうなり意
 と鮪を誅せと心のわけてしまう而してしびとともにしなんとする
 さりとて鮪を生かさば汝も生きん誅せは汝も死せんまことに心こ
 ひしからうと先づ他に汝にゆきたならばころさんの意〇しびつく
 しび しびよ汝はつくじひであるとな怒りたまふされは大魚には心
 をのこされたる様なり〇あられ となと疎になる事一つの事か離

る事これまどまりたることかひろくなるなりされと廣くなるもの
 はあられるなり〇明且 前の事を受けてそのつとめてと係るなり
 さてつとめてといつとめときなり而してはとともさとも云ふいつと殿
 意とと速也めは目なりそのいつとめを形容になさずして目につな
 くなりそのいつのいを省きてつとめてといふ抑いつは物のはつきり
 するをいふにてはつきりとみえてくるをいふ意にて今夜より明朝
 の事いふにて唯單にあさと云ふとは違へりされはまどろむよりは
 つきりにかゝる義それよりまへにかゝりたるなり〇朝廷人 みか
 どもまゐりする人なりさていかしきいりくちの義そのみかどとみい
 かどの約なりされはかどといへと入口よりすべてのかまへをいふ
 になれりそれよりして御用ある官人をもいふになれり〇志毘門
 しびの家につとふなりされはしびのみかどにつとふとおなじ必ず

門にあつまるとはなかもひそ○かく志斐の天皇を蔑視するより朝
 廷の勢うすくなりたる所以と皇統の絶えられたるなり○門 之家也
 ○難可謀 はかりかたからんと云ふ義○軍 いは殿也いくたちい
 く矢いくちなどありさは矢也これ進む意機のひも同意その殿矢を
 用ゐたれはいくさとはいふなりそもく 矢は御國に於て古へ猪鹿
 を射るために用ゐたるか漸々進化するに順ひそれより開けてやむ
 ことをえず人を射ることゝあれり其故にいくさの名稱起りて兵隊
 をも呼ぶ名とあれりまた一軍一大隊の兵にあづかるものとなれり
 ○圍 かくみはかこみの三に轉するなり○とり 之命を取るをい
 ふ殺の字あたれり○各 本居翁はかたみと訓まれたるか非也師云
 おのもくくと云ふなりこれおのれもくくの意○讓 ゆは物を人に
 遣はす事つるは彼の物を人よりもらふなりこれにてやりやふの意

○更 さあらしの意さはまど同じく美稱わらは新字にあたるなり
 ○ざらましかと これ古格にて上にざらましかはと云ふときと下
 に結にざらましかと云ふべきなり○功 いとは勇にて進む意をは雄
 にておゝしき事合して雄々しき事の進む義何にもわれ事の始はお
 くしくすゝむものあればなりされば軍兵のみならず他の大事をも云ふ
 これ勇威をあらはすをいふにていかのなきに對す○いちのなきと
 みいつのなきとおなじ○このかみ とこのうへなり○いなみ
 いなといやと同くいあまんいなびとおなじく形状言でいやと云ふ
 事をするありされと元いなみとはいあみをせさることなり○袁祁
 命 意富祁命に對して袁といへりもと大小にて分別したるなりけ
 は久米の約言なり

袁^ナ祁^ノ之^{イハス}石^ノ巢^ノ別^ノ命^ハ坐^ニ近^キ飛^鳥宮^ニ治^メ天^下捌^ノ歲^ト也^ト天^皇。

娶石木王之女難波王无子也此天皇求其父王市
 邊王之御骨時在淡海國賤老嫗參出白王子御骨
 所埋者專吾能知亦以其御齒可知御齒者如三枝押齒坐也爾起民
 掘土求其御骨即獲其御骨而於其蚊屋野之東山
 作御陵葬以韓侂之子等令守其御陵然後持上其
 御骨也故還上坐而召其老嫗譽其不失見置知其
 地以賜名號置目老嫗仍召入宮內敦廣慈賜故其
 老嫗所住屋者近作宮邊每日必召故鐸懸大殿戶
 欲召其老嫗之時必引鳴其鐸爾作御歌其歌曰阿
 佐遲波良袁陀爾袁須疑豆毛毛豆多布奴豆由良

久母淤岐米久良斯母於是置目老嫗白僕甚耆老
 欲退本國故隨白退時天皇見送歌曰意岐米母夜
 阿布美能淤岐米阿須用理波美夜麻賀久理豆美
 延受加母阿良牟初天皇逢難逃時求奪其御粮猪
 甘老人是得求喚上而斬於飛鳥河之河原皆斷其
 族之膝筋以是至今其子孫上於倭之日必自跛也
 故能見志米岐其老所在故其地謂志米須也天皇
 深怨殺其父王之大長谷天皇欲報其靈故欲毀其
 大長谷天皇之御陵而遣人之時其伊呂兄意富祚
 命奏言破壞是御陵不可遣他人專僕自行如天皇